

# ハイスクールD×D ~煉獄の少女~

悪維持

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

【煉獄の園】を支配する煉獄義姉弟。

その一人である仮面ライダーへレナこと鬼町 夏煉は、鬼崎 陽太郎の命により【ハイスクールD×D】の世界へと派遣される。そして、駒王へと降り立つた彼女が最初に出会ったのは、傷だらけの黒猫であった。

※衝動的に夏煉主軸の小説が書きたくなつたので、投稿してみました。

目  
次

Prologue	前編	1
Prologue	後編	4
Episode 1		
Episode 2		
Episode 3		
Episode 4		
Episode 5		
Episode 6		
Episode 7		
Episode 8		
Episode 9		
Episode 10		
1章 『幕間』		87
第2章 戦闘校舎のPHOENIX		81
Episode 11		67
Episode 12		55
Episode 13		48
Episode 14		41
Episode 15		35
Episode 16		28
Episode 17		23
Episode 18		16
Episode 19		9
Episode 20		4
Episodes 1-5		119
Episodes 6-10		112
Episodes 11-15		106
Episodes 16-20		98
Episodes 21-25		92

# Prologue 前編

此処は【煉獄の園】  
[パーガトリー・エデン]

大地は闇の如く漆黒で覆われ、いたるところにある樹木全ては灰色に染まり、木の象徴である葉は一つも付いていない。まさに地獄と呼ぶに相応しいと言える世界……

そんな世界の中核にそびえ立つのは、まるでおとぎ話に登場する巨大な白き西洋の城……名を【断罪の地獄城】と呼ぶ。

そして、今現在この城にある一室で【煉獄の園】を統治する白髪の青年……鬼崎陽太郎が椅子に座りつつ、目の前に佇む義理の妹である鬼町夏煉へと不気味に輝く深紅の瞳を向けながら、口を開いた。

「さて、夏煉。何故、君が呼ばれたのかは……想像はつくかい？」

「…………わかりません」

「そうだね、『わからない』。それが正当な答えだと思うよ？君は何時も僕や義姉さん……そしてこの城に住む他の皆に追いつく為に己を磨き、不屈の志を常に持ちつつ、日々精進している。君には、何の落ち度も無い……しかし、僕に呼ばれた。何故、どうしてだと考えているかい？」

鬼崎の言葉に、夏煉は表情が強張りながら冷や汗を流しつつゆづりと頷く。それと同時に鬼崎は笑みをこぼしつつ、椅子に立ち上がる。

「フフ……心配しなくても良いよ。別に説教をする為に呼んだんじやないんだ」

「で、でも……陽太義兄さんの真剣な顔を見てたら……つい……」

「まあ、ちょっとシリアルス的な真顔をしたら誰でもね？おつと、そろそろ本題に入るとしようか……」

鬼崎がそう言うと、机に置いてあつた資料を夏煉に手渡した。

「『とある《ハイスクールD×Dの平行世界》による駒王町の管理状況について』…………陽太義兄さん、この資料は一体……？」

「実は我等が主……ヴラド・スカーレット様から、自身が管理している世界：『ハイスクールD×Dの平行世界』にある駒王町で不穏な存在を感知し、一度詳しく調査するようにと指示がでてね。その一件を僕等が請け負う事になつたんだけど……僕はいま手が離せない仕事が山ほどあつて、義姉さんは仕事ほつぱり出してどつかの異世界でガールハント三昧な始末。そこで、夏煉…………君にこの案件を任せようと思うんだ」

「えっ!? わ、私に……？ でも、私以外でも一輝義兄さん達に頼めば……」

「確かにそれも一つの手だ……でもね？ 僕は敢えて君に任せようと考えているんだ。理由は簡単……修行のようなモノさ」

「修行……？」

「そうさ……まあ、気分転換かな？ 此処以外の場所での鍛練や、異世界に居る僕等以外の強者と戦えるから一石二鳥つて奴さ。ああ、心配せずとも……向こうの世界に居る一部の権力者とは知り合いだから……僕か義姉さんの名前を出せば大丈夫だ。さてと、此処まで何か

煉獄の園

質問はあるかい?」

「大丈夫だよ。陽太義兄さん」

「そう……なら、善は急げだ。早速、その異世界へ向かうとしよう」

「はい!」

こうして夏煉は調査+修行の為、鬼崎と共に『ハイスクールD×Dの平行世界』にある駒王町へと向かつた。

# Prologue 後編

夏煉 side

皆さんこんにちは、鬼町 夏煉です。

私は陽太義兄さんと一緒に、幽霊列車でスカーレットさんが管理している『ハイスクールD×D』の世界にやつて来ます。

陽太義兄さんの話によると『ハイスクールD×D』と言うのは、女性の乳好き変態主人公の兵藤一誠さんが、駒王町の管理者である貴族悪魔のリアス・グレモリーの眷属へ転生して強敵を倒しながら、ハーレムを目指すという物語だそうですが……乳好きの変態って、もう主人公として色々とOUTなんじゃ……

「確かにね……物語が始まる以前にも、彼は他2名と一緒に女子更衣室を覗いたり、18未満の成人雑誌を収集したり……と色々ヤラかしている。本来なら停学や、退学になつても可笑しくないんだろうが……其処は主人公補正と言う奴で、見逃してるんだろうね。まあ、それ以前に彼の宿る神滅器ロンギヌスから発するオーラで、物語のヒロイン達は性癖関係無く惚れてハーレムエンド……ああ、思い出すだけでイライラしてくるよ、全く…………どうして主人公つてだけで、やすやすと犯罪とかを見逃すのかな?意味がわからないよ、本当に……!!」

「よ、陽太義兄さん…………？」

「ん?!あ……ああ、スマナイ。ついね……つい…………」

そんなに酷いのかな?その一誠つて人の性癖。陽太義兄さんがこんなに怒るのも初めて見るし………そんな事を考えていると、陽太義兄さんは気を取り直そうと軽い咳払いをした後、懷から二つ折りの紙と分厚い封筒を取り出して手渡した。

「とにかくだ……良いかい、夏煉？改めて確認するけど、この案件はスカーレット様直々の仕事だ……それを忘れないでね。事前にホテルを予約してるから、この地図を頼りに探してくれ。後それから、この封筒には必要なお金が入つてるので、考えて使うようにならう。

「ありがとう。それにしても分厚いね、お金つて何円位入つての？」

「そうだね…………ざつと、百万位かな？」

「ふうん…………え？ひや、百万！？百万つて……！」

「え、少なかつたかい？」

「イヤイヤイヤ！少ないのレベルじやないよコレ！？」

下手したら土地一つ買える額だよ！何、平然とした顔で当たり前のように言えるの！？

「家には資金が大量に溢れ出てるからね。百万は安い方さ、もし無くなつたら銀行に振り込んでおくからちゃんと連絡してね？」

「わ、わかつた……」

若干、納得出来ない所もあるけど…………考えたら負けだと感じつつ、私は中が四次元空間になつてている鞄を抱えながら幽霊列車を降りる。

「それじゃあ、夏煉。くれぐれも気をつけてね？」

「はい！鬼町 夏煉、行つてきます！！」

「フフ……健闘を祈るよ、頑張つてね」

私は元気よく敬礼して、それを見た陽太義兄さんが微笑むと同時に汽笛が鳴り響くと幽霊列車が発車し、陽太義兄さんを乗せて【煉獄の園】へと帰つて行つた。

「ふう…………さて、先ずはホテルに向かおう。仕事はそれからだ」

数秒、大切な家族との別れを惜しむけど……気持ちを切り換えて手渡された地図を元に予約しているホテルへ向かう為に歩き出した。

「えつと……確かに此処を曲がつて、三番目の建物の角を右、その次で……意外と遠いな」

ホテルを探して歩くこと30分……一向に目的地へ到達出来ずに困っていた。もうすぐ暗くなる時刻だし、どうしよう……。

「はあ……ん？ あれは……」

ため息をしながら途方に暮れていると、通りかかった公園の側に、一匹の黒い猫が横たわっていた。しかも身体の至るところが傷だらけで、今にも息絶えそうだつた。

「た、大変！直ぐに治療しなきゃ！」

私は急いで倒れている猫へ駆け寄り、鞄から白い救急箱を取り出し、その中にある道具を使って治療を行つた。中に入っている治療道具は陽太義兄さんが開発したモノだから効果観面で、数時間もすれば傷が消えて元気になる。

「でも、猫さんをこのままにしておく訳にもいかないし……ん、何コレ？」

そんな時、猫さんの身体から変な光が見える。気になつてゆつくりと右手を近づけて猫さんの身体を触ろうとした瞬間……右手が猫さんの身体に入つてしまつた。

「ツ  
!!??」

私は慌てて猫さんに入つてしまつた右手を引っ込めた。

「い、今のは……一体…………？」

冷静さを保つてはいるけど、心は混乱していた。けど、直ぐに落ち着きを取り戻した私はもう一度、おそるおそる猫さんに右手を近づける。そして身体へ入ると、指先に何か変なモノが当たる感触がした。そして、その変なモノ<sup>ビショップ</sup>を右手で掴んで引っ込んでみると、掴んだそれはチエスを使う「僧侶」の駒だつた。

「何これ、チエスの駒…………じゃないみたいだけど…………って、それより

も猫さんをどうにかしないと」

私は猫さんから出てきたチエスの駒をポケットに入れ、鞄からバケツ型の保護カプセルを取り出して猫さんをカプセルに入れた後、救急箱と一緒に鞄に入れてホテルへ急いで向かつた。

# 第1章 旧校舎のDIAPOLOS

## E p i s o d e 1

夏煉 s·i·d·e

私が駒王町に訪れて、新生活を始めてから数日過ぎた頃……

「ハツ、ハツ、ハツ……」

私は黒色のジャージを着用し、朝から駒王町周辺のランニングに勤しんでいた。基本的に身体を鈍らせたくないのと、ジーツとしてるのが嫌なので毎日欠かさず行っている。

別に疲れるのがデメリットだとは思わない。デメリットには必ずメリットがつきものだ。例えばこうして町中をランニングすれば、何処でどんな建物があつて何の仕事をしているのかが分かるから町の構造を覚えられるし、自分の体力増量には都合が良い。そして、何より……

「あ、小猫さん。おはようございます！」

「……おはようございます、夏煉さん」

ランニングできる友達が出来るのが嬉しいからだ。

私が出会ったのは、陽太義兄さんと同じ白髪で私より身長が少し低い女の子（でも、年上だと知った時はビックリしたな……）。

名前は塔城とうじょう 小猫こねこさん。近くにある駒王学園の一年生で、私のラン友（ランニング友達の略）です。

「……今日もランニングご苦労様です」

「ありがとうございます。小猫さんも、今からですか?」

「……いえ、私はもう上がる所です。もうすぐ学校なので」

「そうなんですか……一緒に走れなくて残念です。もうちょっと早く起きようかな?」

「……早寝早起きは大事ですが、だからと言つて早く起きても体調を崩しては意味がありませんよ?これは年上としてのアドバイスですから覚えておいてください」

「アドバイス、痛み入ります。あ、もし宜しかつたら何時辺りに起きるか教えてもらえますか?私、携帯持つてなくて……」

「そうですね……平日の朝は5時丁度で、土日祝は6時辺りに起きますかね?」

「5時と6時か……わかりました。それじゃあ、私はこれで失礼します。あ、後!学校頑張つてくださいね」

「……ありがとうございます、ではまた明日」

「はい、お疲れ様でした!」

そうして小猫さんと別れ、私は宿泊しているホテルへと帰路についた。

「お帰りなさいませ、鬼町様」

「ただいま戻りました。スミマセン、預けていた部屋の鍵をお願いで  
きますか？」

「畏まりました。では、どうぞ……」

「ありがとうございます」

ホテルへと戻つて来た私は、受付の人から預けていた鍵を受け取つ  
てエレベーターで現在住んでいる部屋へ向かつた。そして、鍵でロツ  
クを解除し部屋へ戻る。

「あ、夏煉。お帰りにやあ♪」

「ただいま戻りました。黒歌さん」  
くろか

ソファーに寝転んで出迎えてくれたのは、黒色の着物をはだけさせ、薰義姉さんくらいのスタイルに猫耳と二本の尻尾が生えた女性  
だった。

この人は黒歌さん。私が住む部屋の同居人で、あの時助けた猫さん  
の正体です。

黒歌さんは猫又と呼ばれる妖怪で、悪魔と契約し転生悪魔となつたのですが、とある事が原因で主を殺してはぐれ悪魔となつて指名手配され……傷だらけになりながらも、追っ手を撒いてこの町に流れ着いた所で私に出会つたそうです。

でも最初に出会つた時はビックリしたな……猫さんと寝た筈なのに、朝起きたら目の前にむにゅむにゅした柔らかいモノ二つに包まれて窒息しそうになつて離れた時に見たことない女の人が居て……

「んにゃ？どうしたのにや、夏煉？」

「いえ、最初に黒歌さんに出会つた時を思い出してまして……なんというかインパクトが強いっていうか…………こう、顔に触れた柔らかさが忘れられないというか」

「フフン♪なんなら私の胸でもう一回包んであげようかにゃ？」

「止めてください、今度こそ窒息死しちゃいそうで怖いんですよ」

【にやははは♪冗談よ、冗談。でも、一番驚いたのは、私の中にあつた  
イーヴィル・ピース  
〔悪魔の駒〕】を夏煉が取り出してくれた事なんだよね……」

黒歌さんがそう呟いた後、私はテーブルにちよこんと置いてある僧侶の駒に視線を向けた。黒歌さんが言うには、この駒は悪魔が他の種族を同じ仲間に転生させる道具らしく……普通は取り出したり出来ないんだけど、私にはそれが簡単に取り出せた。

私達煉獄義姉弟には特殊な力が秘められていて、その力の顕現は個人差によるモノらしい。薰義姉さんが闇、陽太義兄さんが煉獄の炎、そして一輝義兄さんが毒……と様々な能力を有している。もしかしたら、私の能力は摘出に特化したモノなのかも知れない。

「あ、そうにゃ！そろそろご飯にしない？私もう、お腹ペコペコで……」

「へ？ああ、そうですね。じゃあ、ビュッフェ食堂で済ませますか？」

「びゅつふえ……何それ？」

「食べ放題の意味ですよ。このホテルは、ご飯が沢山食べられるんです」

「食べ放題!? それじゃあ魚も食べ放題かにゃ!!」

「そうです」

「ニヤフフフ……！ それなら直ぐにレツツゴーだにゃ♪」

「わっ！ ちょっと……む、胸を押しつけないでくださいよ!!」

「良いじやにやいの♪ 女の子同士なんだから、さつ！ 早く行こ!!」

魚の食べ放題だと聞いた黒歌さんは、スキップを踏みながら私の腕に豊満な胸を押しつける。私は恥ずかしく思いながら、黒歌さんと一緒に食堂へ向かった。

「すくびく……むにやむにや……もうたべれにやい……」

「はあ～……なんでご飯食べるだけでこんなに疲れちゃうのかな  
…………」

食事を終えた私達は、部屋へ戻りテレビ番組でも見ながら時間を過ごしていた。たまには休む事も大切だからね。それに、黒歌さんは魚料理を沢山食べてご満悦に眠つてゐるし…………てか、あんなに食べて太らないのかな?

まさか…………

「すく……びく……すく……びく」 ボイーン!

「…………」

栄養全部が胸に蓄積してる……訳ないよね、多分。

冷や汗をかきながら考えていると……黒歌さんが苦しそうな顔をしながら寝言の様にあの言葉を呟いた。

「白音…………ごめんね…………独りにさせてごめんね…………白音  
…………！」

「黒歌さん…………」

そう、たまに「白音」という名前を呟きながらに麲されていた。私

は近くにある布団を被せ、黒歌さんの額を優しく撫でる。そうすると  
だんだん楽しい表情になった。良かつた、これならもう安心……

「ん？」

そんな時、背後から小さい目玉で後ろに尻尾の様な突起物がある物体【眼魔眼魂】が出現し、黒色の瞳から地図を写したモニターが出現し、ある建物に赤い星が点滅しながら光っていた。

「仕事か…………ありがとう、それじゃあ他の皆と引き続き宜しくね？」

私がそう言うと、眼魔眼魂はモニターを消して空間へ消えていった。

そして、私も直ぐに出かける準備を整え終えた後、未だに幸せそうに眠っている黒歌さんを残し、眼魔眼魂が見つけた場所へと向かった。

## E p i S o d e 2

夏煉 s i d e

眼魔眼魂が発見した廃墟へ辿り着いた私は、早速内部へと歩を進める。辺りは暗く、下手をすれば転ぶかも知れない状況だけど……私はそんな事は構い無しに進んでいく。こういう暗い場所は、時々陽太義兄さんや薫義姉さんと一緒に来ていたから問題は無く、むしろ慣れと言つても過言じやなかつた。

「さてと……ターゲットは何処に……？」

そう咳きながら探していると、目の前に上半身は裸の女性で両手に槍を持ち、下半身は節足動物になつてゐる怪物が現れる。そして口からヨダレを垂らしながら私を凝視した。

『ゲゲゲゲ…………また馬鹿な餌がやつて來たな。さて、先ずは何処から食つてやろうか…………!!』

「…………」

『なんだ……私を見て恐れているのか？なら安心しろ…………直ぐに殺してやるからさああああああああああああああああああああああ!!!!』

怪物は両手に握つてゐる槍を私に向けて突き刺そつと襲いかかつてくる。だけど、私はその攻撃を紙一重で回避して飛び上がり、顔面に蹴りを食らわせた後に着地する。

『ブギヤブ?!?』

「单调だね……そんな攻撃、目を瞑つても避けれりよ」

『よ、よくも私の顔を……!! ナメるな、このクソガキがああああああああああああああ!!!!』

怪物は槍を荒々しく振り回して、私を突き殺そうと攻撃してくる。その攻撃を私は、宣言通りに目を瞑りながら身体を逸らすだけで避け続ける。

『何故だ！何故当たらぬといいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい』  
『いいい！？』

「答えは簡単……貴女が弱いだけだよ」

怪物は攻撃が当たらないのと、私に言われた事に逆上し突進していく。

私は一旦距離を離し、腰辺りに両手を翳す。すると翳した箇所が黒いモヤに覆われると同時に晴れると、其処に『妖怪 一つ目小僧』の顔をしたクリアグレーのベルト【ゴーストドライバ】が出現する。

そしてスカートのポケットから黒紫色の目玉型アイテム【D00：ヘレナ眼魂】を取り出して、横のスイッチを押す。すると、瞳の絵柄が変わりアルファベットの『H』が浮き上がる。

そして、ドライバーのバッклを開いてヘレナ眼魂を中枢にセットしてバッカルを閉じた後、右側に取り付けられているレバーを一度引いておく。

『アーラー！』

『ナツ！ゴワハツ!!??』

ドライバーから音声が響いたと同時に、ドライバーの中核から黒地に紫の縁取りのパークターの幽霊『ヘレナゴースト』が出現し、無防備の怪物へ強烈な体当たりを浴びせ、後ろへと吹き飛ばした。

『バツチリミトケー！バツチリミトケー！』

ドライバーから響き渡るロツク調の音楽と共にヘレナゴーストは、私の周囲を飛び回る。そしてもう一度引いておいたレバーに手をかけた後……

「変身」

その言葉と共にレバーを押し込むと、私の周囲に黒い霧が発生し、私の身体を紫のラインが入ったボディースーツが包みこむ。そして、飛び回っていたパークターが被さつたと同時に何もなかつた顔に紫と黒で鋭い目付きをした顔が描かれ、額には炎の様な紫色の二本の角がついた。

『カイガン！ヘレナ!!デッドゴー！覚悟!!キ・ラ・メ・キ！ゴースト  
!!』

羽織つた瞬間にドライバーから音声が流れ、被つていたフードを取ると共に殺氣とプレッシャーを放つた。

怪物はようやく起き上がりつて憎悪の目で睨むけど数秒すると、顔が恐怖の表情へと変わっていた。

『な、なんだその姿は!?まさか神器使いか!!』

セイクリッド・ギア

「……残念だけど、これは神器じゃない」

『じゃあ、それはなんだ！お前は……お前は一体なんなんだよおおおおおおおおおお!!!!』

「良いよ。それじゃあ特別に教えてあげる……」

恐怖に飲まれた怪物は叫びながら槍の矛先を突きつけて攻撃を仕掛ける。私は冷静に眺めながらゆつくりとレバーに手をかけて、変身と同じようにレバーを一回引いて、押し込んだ。

「私は……………仮面ライダーへレナだ！」

『ダイカイガン！ ヘレナ!! オメガドライブ!!』

私がそう叫ぶと同時にドライバーから音声が鳴り響くと背後に紫色の巨大な目の紋章が出現し、そのエネルギーが右脚に収束する。そして宙へと飛び上がり、紫色のエネルギーを纏つたライダーキックを怪物の腹部に食らわせた。

「ハアアアアアアアアアアアアアツ  
!!!!」

オメガ  
ドライブ

ライダーキックによつて怪物は、コンクリート性の壁を幾つも突き破りながら勢いよく吹き飛んだ。私は着地すると壁に凭れて戦闘不能となつている怪物へ一步一歩近づいた。

『ヒツ?!も、もう止めてくれ!!い、命だけは……命だけは助けて!!!』

「…………」

『い、嫌だ…………もう痛いのは嫌だ!!お願ひします!!!た、助けて  
…………!!!!』

「…………」

必死に命乞いをする怪物を気にせず、私は無言で右手に力を入れて  
オーラを纏わせる。

『イ!・イヤだ!!イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ  
イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ!!死ぬのはイ  
ヤだあああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああああああ  
!!!!』

もう涙とか鼻水でぐちゃぐちゃに醜くなつた顔をした怪物を無視  
し、私は力一杯に胸部へと右手を勢いよく突っ込んだ。

『アギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!』

苦痛の叫び声を無視し、私は手探りであるモノを探す。そして、直  
ぐに見つけた後に勢いよくそれを引っこ抜いた。

『ア……アアア……ア……』

あるモノを怪物から抜くと同時に、怪物は糸が切れた人形の様に静かになる。すると異形の姿から徐々に裸の女性の姿へと変わり、醜い表情も穏やかな寝顔へと変わつたていった。

「はい、これでお仕事終わりっと……後はこの人を……」

そうして裸一貫となつた女性にローブを着せた後、私はその人を担いで廃墟を後にした。

そして、その数時間後……

「はぐれ悪魔バイサー！ グレモリー家次期当主の名において貴方を倒……つて、あれ？」

「あの、部長……何もいませんけど？」

「くつーまたヤられた……！ 一体何処の誰かは知らないけど、私が管理する町でこれ以上好き勝手なマネは許さないわ！！」

ヘレナと彼女達が遭遇するのは、まだ先の話だ……

## E p i S o d e 3

夏煉 s i d e

一ピピピピッ！カチッ!!

「ん……んん……ふわあ～ もう朝？」

まだ目が覚めていない状態で、目覚まし時計を見てみると時刻は7時を過ぎていた。普段なら5時から5時半辺りで起きていたんだけどな？早寝早起きを心がけているのに、これじゃあ本末転倒だよ……でも、昨日は急な仕事があつたから仕方ないと言えばそうだけど……

「とにかく……一度起きよ（モニユ）…………ん？」

「ふにゃああ～……朝から私の胸を揉むにやんて……にやふふ♪夏煉は甘えん坊さんのかにや～？」

「わきやあツ！つと、アイツタアツ!?」

ベッドから起き上がりろうとした瞬間、何やら柔らかなモノを掴んでいる感触がし……おそるおそる視線を向けると、其処にはいつの間にか黒歌さんが薄い襦袢姿じはんで隣に潜り込んでいて、掴んでいたのは彼女の豊満な胸だつた。思いもよらないアクシデントに、私はサツと黒歌さんの胸から手を放すけど、運悪くベッドから転げ落ちて頭を床にぶつけた。つう～～ツ!!めっちゃ痛い!!!!てか、今の痛みで完全に目が冴えた。

「く、黒歌さん!? いつの間に私のベッドに潜り込んでたんですか?!?」

「そりゃあ～ね？グッスリと寝てて途中で起きたら、夏煉が可愛い寝顔でスヤスヤ寝てたからあ～ なんとなあ～く、潜り込んでみたんだにやあ♪」

「も、もお～ツ!! 心臓に悪いから止めてくださいよ!! 私だつて疲れてるんですから……！」

「メンゴメンゴ、もうしないにや♪」

「……もうビュッフエ連れて行くの止めますよ？」

「マジ、スミマセンしたあツ!!??」

一ピンポオーン♪

「「ん?」」

そんなコントじみた会話をしている最中、突如インターほんが鳴り響く。私はドアの前まで来て、ドアスコープを覗くと……其処に居たのは金色のメッシュが入った髪で和服を着こなした中年男性が佇んでいた。しかも、笑顔で……

私はため息を吐きながら、ドアを開けてその人を中心へと出迎えた。

「おい～っす、邪魔するぜ」

「ここにちはアザゼルさん……とゆうか、また仕事サボつて来たんですけど？ 境天使総督さんは随分とお暇なんですね」

「サボるとか言うなよ、ちゃんと全部終わらせて来たんだからさ。それより嬢ちゃんよ、そんなに怖い顔してると彼氏とかに逃げられるぜ？ まあ、俺は嬢ちゃんの様な可愛い娘は大歓迎だがな？」

「つて、言つてるけど……どうする陽太義兄さん？」

『総督アザゼル。それは僕に……否、我々に対する宣戦布告と受け取つて宜しいのでしょうか？』

「マジでスンマセン！冗談だからそれだけは勘弁してくれません！？今、アンタ等と戦争つて事になつちまつたら全滅しかねえ！！」

『冗談なら良いんですよ？ですが、冗談も程々にしないとトンでもないしつப返しが来ることをお忘れのないように…………』

「…………はい、以後気をつけますです。はい…………（コイツキレイると超怖えツ！？薰が尻にしかれているのが痛い程わかつた気がする…………）

『では、僕も暇では無いのでこれにて失礼します…………じゃあね、夏煉』

「うん、またね。陽太義兄さん」

中年男性…………アザゼルさんのセクハラ紛いのナンパに対し、私はいつの間にか出していたパソコン型の通信機で、その光景を通信先の陽太義兄さんに見せていた。

陽太義兄さんは満面の笑みで殺氣を放つていてのに対し、アザゼルさんは震えながら土下座をしていた。これで、陽太義兄さんが超越者を越えた実力者だと十分に理解できた。

因みに、このアザゼルさんは墮天使で構成された組織【神の子を見張る者】のトップらしく……特に薰義姉さんとは趣味と性格がベストマッチな関係で時々街に遊びに行つては居酒屋で飲ん

でいたり、若い女人をナンパしてゐるらしい。

「ふう、命拾いしたぜ……さてと、此処からは仕事の話だが……」

「はい、彼処にある就眠カプセルの中でグッスリと眠っていますよ」

アザゼルさんが汗拭いながら立ち上がりつつ、私に視線を向けると……私は、人一人入れる巨大な縦長のカプセルへ指を指した。そのカプセルの中では、昨日に私が戦つたはぐれ悪魔だった女性がスヤスヤと眠つていた。

「おうおう、これまた随分と別嬪さんだな…………え、と？」

アザゼルさんは女性の顔を眺めつつ、懐から一枚の手配書を取り出した。

「確かに指名手配されてるはぐれ悪魔のバイサーだ……それじや、後はグレゴリ<sup>ウチ</sup>で預かるぜ」

「宜しくお願ひします」

「あいよ……ああ、それとだが……どうやらウチの下端四人が無断でこの町に侵入したらしくしてな…………始末は嬢ちゃんに任せてもらつても良いか？」

「構いませんけど……部下の手綱ぐらいしつかりと引いてもらえませんか？私だつて色々と忙しいんですからね」

「うぐつ！自分の管理力の無さが今になつて痛感した氣がするぜ…………わかつた、お詫びとして何処か好きな所に連れてつてやんよ」

「じゃあ、有名洋菓子店【GENM】に連れてつてください。ラン友がオススメとして教えてくれたんです」

「私は回転寿司屋の【ゴールド寿司】に行きたいのにや！彼処はネタが豊富で一度行ってみたかったの♪」

「了解だ。【GENM】と【ゴールド寿司】な？ そんじやあ、俺はこれで……」

「はい、お疲れ様でした」

「またにや♪」

アザゼルさんはそう告げると、転移魔法陣を展開して女性が入ったカプセルごとその場から消えていった。

その後、私は四次元鞆から大量の眼魔眼魂を召喚しはぐれ悪魔及び堕天使四人の捜索を命じた。

## E p i S o d e 4

夏煉 s i d e

アザゼルさんから仕事を引き受けた後、私は気分転換に駒王町の商店街で散歩をしていた。

眼魔眼魂の情報収集力の高さなら数時間辺りではぐれ悪魔や、墮天使達の居場所を簡単に探知できる。だから、私はその間に訓練や休息等の自由行動が同時に出来るんです。

「さてと、何処のお店に行こうか……ん？ 彼処に居るのは……」

私は、商店街に並ぶ様々なお店の中から何処に立ち寄ろうかと見渡していると……昔ながらにあつた駄菓子屋の店前で、見知った人物が其処に居た。

「小猫さあくん！」

「……ん？ 夏煉さん、どうもです」

「ここにちは、学校帰りですか？」

「はい、部活が早く終わつたモノで……ちょっと買い物を少し」

そう言いながら小猫さんは、しゃがみながら店前で並ぶ沢山の駄菓子に視線を向ける。私も小猫さんの隣で同じようにしゃがんで、駄菓子眺めていると……

「あれ、其処に居るのって小猫ちゃん？」

「むつ……」

「？」

「お！やつぱ小猫ちゃんじやん。それに隣に可愛い娘も居るなんて俺つてスンゲエラツキーだなあ♪」

突然、茶髪の不良めいた服装の男の人に声をかけられた。小猫さんはその人の顔を見ると、何故か不機嫌な表情になりながらボソツと呟いた。

「…………兵藤先輩」

「ツ!?!?…………この人が兵藤 一誠…………」

私は小猫さんの言葉に思わず驚愕してしまうが、数秒も立たずに冷静となり、兵藤さんに視線を向ける。容姿は特に平凡な不良の人ではあるけど、周りには何かすごく赤く濃いオーラを纏っていた。けど、顔はだらしなく私を凝視し……まるで品定めの様な感じでイヤらしくジロジロ見つめられ、生きてる実感がしなかつた。

そんな時、兵藤…………いや変態さんは私に近づいてイヤらしい笑顔を向けながら話しかけてきた。

「（おおうツ！これが俗に言う口りおっぱいって奴か、中学生辺りの年齢のわりにおっぱいデケエツ!!） ねえ、君名前は？ 小猫ちゃんの友達なんですよ？ あ！俺は兵藤 一誠、小猫ちゃんの先輩なんだよ。 なあ、君何処に住んでるの？もし良かつたらメアド教えてくんないかな？ あ、それか「…………あの、いい加減にしてもらえますか？」えつ？ ヒツ??!!」

イヤらしい笑顔で次々としゃべりまくる変態さんに対し、私は少しだけ殺氣を混ぜた冷たい視線で睨みつける。というか、軽く殺氣を出

しただけで怯えるとかダサすぎでしょ？

「……あのですね。この際ハッキリ、全て言わせていただきますけど……貴方みたいに人を商品みたいに見る最低な人に教える名前はありません。確かに小猫さんとは知り合いですけど、貴方と私は初対面ですよね？先輩だから何ですか？小猫さんの先輩だから、知り合いの私と仲良くなれるとか頭大丈夫ですか？それと何処に住もうと私の勝手ですし、教える義理もありません。それから私…………携帯持つてないんで」

そうして、向こうから聞いてきた全てを冷徹かつ威圧的に全てに返答した。その相手である変態さんは、腰が抜けたかのように座り込みガクガクと膝を震えさせていた。

「……話になりません。小猫さん、私はこれで失礼します」

「……あ、はい」

イライラが一向に収まらず……一応、小猫さんに挨拶を済ませて私はその場から早足で去る。

陽太義兄さんがあの人を嫌う理由……わかつた気がするな。これならアザゼルさんがの方が百倍マシだよ本当に。

「か、夏煉……何をそんなに怒ってるのかにや？」

「……別に怒つてませんけど？」

「で、でも……そのオーラからは不機嫌というかにやんというか……そんな感じが溢れ出てると思うんだけど……」

「…………気に入らない人に遭遇しただけです」

未だにイライラが収まつていらない私を見て、黒歌さんは枕を抱きしめながら部屋の隅で怯えていた。そんなに怖いのかな？私つて…………そんな事を考えていると、眼魔眼魂が空間から現れる。どうやら、はぐれ悪魔が出たみたいだ……

はあ……気分が優れないけど、仕事じや仕方ないか。

「さてと、お仕事しに行つてきますね」

「う、うん……いつてらっしゃい」

黒歌さんの言葉を聞き終え、私ははぐれ悪魔が出現した場所へと向かつた。

そして、現場にたどり着いた私は、巨大なサンショウウオで、額に人間の顔が浮き上がった異形と遭遇した。

『オマエ…………クウ!!!』

「やれるものならやつてみなよ、今の私は機嫌が悪いんだから……！」

私は腰元にゴーストドライバーを出現させ、ヘレナ眼魂をセットした。

『アーカー！バツチリミトケー！バツチリミトケー！』

「変身！」

『カイガン！ヘレナ!!デッドゴー！覚悟!!キ・ラ・メ・キ！ゴースト  
!!』

ヘレナに変身し終えた私はゴーストドライバーに両手を翳し、青色を基調とし右手を模したマジックハンド型の可変武器【ガンガンハンド】を武装した。

!!!!『クツテヤルウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

「一撃で潰す…………！」

猛烈突進するサンショウウオ怪獣に対し、私はガンガンハンドの持ち手部分に刻まれた目玉模様をゴーストドライバーに翳してアイコントакトさせる。

『ダイカイガン！ガンガンミトケー!!ガンガンミトケー!!』

『イタダキマアアアアアアス!!』

「せえくのつ!!!」

『オメガスマツシユ!!』

オ  
メ  
ガ  
ス  
マ  
ツ  
シ  
ユ

力強い音声が鳴り響くと共に背後に目の紋章が出現、紫色のエネルギーはガンガンハンドの先端に収束する。そして、ギリギリまでサンショウウオ怪獣が近づいて大きく口を開けた瞬間に掛け声と共にトリガーを引きながら、下顎部分に強烈な打撃を食らわせて巨大な身体ごと上空へとぶつ飛ばした。

『ゴアアアアアアアアアアア!!!』

叫びと共に後ろへとひっくり返えりながら墜落したサンショウウオ怪獣は、手足をピクピクとさせて口から泡をふかせながら失神した。私はガンガンハンドを左肩に担ぎながら、サンショウウオ怪獣の巨大な腹に飛び乗り、右手を身体の中に突っ込んで「ポン兵士」の悪魔の

駒3つを回収する。そうすると、サンショウウオ怪獣は裸の男性へと姿を変えた。

「はぐれ悪魔 マンダショ討伐及び、悪魔の駒摘出完了…………さて、帰り…………ん？」

引き上げようとした瞬間、目の前の地面に赤色に光輝く魔法陣が出現する。

はあ、また面倒事の予感がするな…………

## E p i S o d e 5

小猫 s i d e

どうも、初視点を務める塔城 小猫です。

私は今、オカルト研究部の活動で指名手配されたA級はぐれ悪魔マンダショの討伐へとやつて来たのですが…………

「またやられた……！今月に入つてもう10回目、一体何がどうなつているのよ!?」

「落ち着いてください、リアス」

「これが落ち着いていられるというの!?私の領土で好き勝手している挙げ句、大公から命じられた討伐対象をことごとく横取りされている始末…………この町の管理者である私に対する宣戦布告としか思えない…………まだ下手人はこの辺りに潜んでいる筈、徹底的に探し出して今度こそソイツの尻尾を掴んでやるわ!!」

討伐対象が先に狩られた事にウチの部長ことリアス・グレモリー先輩は今の今まで我慢していた苛立ちが爆発し、同学年で副部長の姫島朱乃先輩の言葉も聞かずにそのヤつたであろう下手人の捜索を開始しました。

実はこの数日前、突然はぐれ悪魔が次々といなくなるという現象が勃発していた。はぐれ悪魔がいなくなるのは良いことだと私は思うのですが…………それでも部長は、大公へのはぐれ悪魔の討伐命令を遂行して評価を上げる事を考えているらしく、先に討伐対象が狩られる事が一番気に入らないようです。

そんな時に、部長の揺れる乳をニヤケ顔で見ていた兵藤先輩が、目を光らせながら我先にと前に出て声を上げる。

「任せてください部長！俺が先にソイツを見つけて、必ず部長の元へ連れてこさせますよ!!」

「あら、随分頼もしい事言つてくれるわねイッセー？それなら今から二手に別れて探してみましょーか。そうね……朱乃と祐斗は私と三人で、イッセーは小猫の二人でお願いね。良い？見つけ次第捕まえて、直ぐにでも私の元へ連れてきてちょうだい」

『はい！』

イヤイヤ、どうして私がこの人と組まなきやいけないんですか？まあ、拒否権とか無いらしいから仕方ないと思しますけど……

「てな訳で……一緒に頑張ろうぜ、小猫ちゃん！」

「スミマセンが、あんまり近寄らないでくれませんか？」

「ちょっと酷くない!? もう少し仲良くなろうぜ……同じ部員なんだからさ」

「そういうの関係無しに、先輩はキモいです」

「ガハツ!?」

事実を突きつけると、何故か血反吐を吐く兵藤先輩を無視し……私は周囲に警戒を怠らないように気を配る。そうしていると……

『ウウウ…………』

前方から男性か何かのうめき声が耳に入る。そして、ゾンビの様な足音でその正体は明らかとなつた。

それはのっぽらぼうのように顔の無い真っ黒な顔に黒いボディースーツのような身体、胸部には人間の肋骨を象つたような模様があり、黒のパーカーを羽織つて腰元には半目をイメージしたかの様なベルトを着けた異様な姿だつた。

その異様な人物は、ゾンビの様に緩慢な足取りで私達へと一步一步近づいてくる。案外大したことは無いと感じつつも、油断できないと考へて身構える。けど……

「よし！あんなんなら俺でも倒せる！」

兵藤先輩は楽勝だと言わんばかりに左腕に赤い龍を模した神器【龍の手】トウワイス・クリティカルを展開し、異様な黒怪人に接近し顔面目掛けて2倍にしたパンチを浴びせた。でも、黒怪人は殴られて倒れた後にゆっくりとゾンビのように起き上がつた。

「なつ!? んならもう一発食らえッ!!」

起き上がる黒怪人に驚くも、兵藤先輩は再び拳をぶつける。顔面に命中はしたものの、今度は倒れずにいつの間にか装備した短剣で兵藤先輩を攻撃する。

「うわっ!? アツブねえ～……武器とか使うなんて卑怯すぎんだろ！ 恥ずかしくねえのか男として!!」

黒怪人の攻撃を咄嗟に避けた兵藤先輩は、何故か黒怪人に卑怯だと罵る。

イヤ、意味わかりませんよそんな理屈。そしてあの人もそんなの関係無いとかの感じしてますし……

そんなアホらしいやり取りに呆れないと……突然、同じ姿の黒怪人が大人数でゾロゾロと出現し、私達の周囲を取り囲んだ。

「なつ?! いつの間に……てか、よく見ると目の前のコイツとおんなじ姿の奴等ばつかじやん!?」

「愚痴言つてる場合じゃありません……来ますよ」

愚痴をこぼす兵藤先輩にはつきり言つた直後、取り囲んだ黒怪人達は一斉に襲いかかつた。

私が戦闘態勢に入るけど、何故か兵藤先輩が私を庇うかの様に私の前方へと立ち塞がつた。

「小猫ちゃんは下がつて！ コイツ等全員、俺が倒してやる!!」

「いや、何言つてるんですか？ この状況で……」

「ウオラアアアアツ!!!

「……話聞いてないし」

兵藤先輩は神風特攻隊のような勢いで、黒怪人達に突撃した。けど、黒怪人の一人が兵藤先輩の突撃をサラツと避けて足を引っ掛け

る。

「グペツ!?」

引っ掛けられた兵藤先輩は、奇声を発しながらズベツと倒れる。そのチャンスを待つてたかの様に、黒怪人達は一斉に兵藤先輩へ数によるスタンピングを開始した。

そんな光景を眺めていたら、後ろから黒怪人達が私を捕まえようと思ふ。

「甘いですよ」

私は黒怪人の一人の腕を掴んだ後、思いつきり他方向から迫つてくる集団へと背負い投げの如くぶん投げる。ぶん投げられた黒怪人は集団に激突すると、ボウリングのピンみたくバタバタと倒れる。

そして私は、次々と近づく黒怪人にファインガーブローブ越しのストレートパンチとキックの連鎖を浴びせ続けてぶつ飛ばす。しかし、黒怪人達は暫くするとゾンビの如くゆっくりと復活し迫つて来る。

一人一人は大した事は無くとも……集団で来られるところはキツい…………倒して倒しても起き上がってくるのがタチが悪いなど思いつつ格闘戦で迎撃を繰り返していると、突然黒怪人達の動きがピタリと止まる。

何が起きたのかと思い、辺りを見渡すと黒怪人達とは違う謎の人物が、ゆっくりと歩を進めながら現れた。

その人物は、言い表すのなら紫色の鬼をヒーローにした姿だつた。紫色の二本角に攻撃的な顔、羽織つている黒地で紫色の縁取りパークーと腰元には目玉を模したクリアグレーのベルト……黒怪人と同じ要素があるが、この人物だけは違う…………そう感じ取れた。

私は思わず身構えつつ警戒しようとした瞬間……気づけばその人物は、私の目と鼻の先まで来ていた。

「ツ!?

まるで瞬間移動をしたかの様に接近され、危険を察知した私は咄嗟に距離を離そうとするが……

ズブツ!

それよりも速く、その人の右手が私の胸部を貫いた。

## E p i S o d e 6

小猫 s i d e

……此処、は……私は確か……胸を貫かれて

(白音……)

ツ!?この声は……姉様? 黒歌姉様なんですか!?

(良かつた元気そうで……)

ま、待つてください姉様! 私はまだ姉様に聞きたい事が……!

(ごめんなさい白音……こんなお姉ちゃんで本当にごめんね?)

イヤ……イヤアツ!! 行かないで、私を一人にしないで姉様あツ!! 黒  
歌姉様ああああああああああああああああツ!!!!

「…………」ちゃん……小ちゃん！しつかりしてください、小猫ちゃん!!

「う……ん……あけ……の……せん、ぱい……？」

「ああ、気がついたのですね……良かつた」

意識がうつすらと覚醒し、まぶたを薄めに開けてみると……目の前に目尻に涙を溜め、心配そうな表情をした朱乃先輩が見えた。首を動かすと、気絶しているだろう兵藤先輩へ必死に声をかける木場祐斗先輩と二人を無視して何処か眺めている部長が目に入つた。私は起き上がろうとするけど、どういう訳か力が上手く入らずに倒れそうになつたその時、朱乃先輩が優しく受け止めてくれた。

「ああ……いけませんわ、まだ安静にしていないと」

「スミマセン、身体がどうにも重くて……」

「ん？あら、気がついたようね小猫」

ようやく部長が私に気づくと、腕を組ながらやつて來た。

「部長……」

「まあ、この状況を見れば大体わかるけど……もう少し私達が来るまで時間稼ぎは出来なかつたのかしら？」

「…………」

さつきよりも不機嫌な感じで部長は私を睨み付けるが、私は敢えて視線をそらす。

「リアス、あまり小猫ちゃんを責めないで上げてください。イツセー君はまだ入ったばかりなのはともかく、小猫ちゃんも私達が来るまで必死に戦っていたんですよ？」

「それとこれは話は別よ。せっかく下手人を捕まえるチャンスだつたのに……」「人ががりでこのザマよ？ 使えないにも程があるわ」

「ツ！？ リアス！ 貴女、自分の眷属になんて事を……「大丈夫ですよ、朱乃先輩」こ、小猫ちゃん？ しかし……」

「……あの時、油断した私が悪いんですから……責められて当然なんです」

「で、でも…………」

「小猫の言うとおりよ、朱乃？ わかつたなら今後は私への発言は慎んでちょうだい」

「ツ！…………わかり、ました」

「それから小猫？ 今回は朱乃に免じて許すけど、今度しくじつたらどうなるか…………わかっているわね？」

「…………はい」

「なら良いわ……さつ、人が来る前にさつさと撤収するわよ」

部長は転移魔法陣を展開すると、その場から消えた。それに続いて兵藤先輩を担いだ祐斗先輩が、そして最後に朱乃先輩が私を心配そうに支えながら魔法陣へと入つていった。

これは後で気づいた事ですが、私が紫鬼の人に貫かれたであろう胸部分を見てみたら貫かれた後が残つておらず……まつたく無傷だったのと、何故かあつた筈であろうナニカがポツカリと無くなっていた事だった。

黒歌 side

「はあ、さつきの夏煉……怖かつたにやあ～」

あんなに殺氣満々なの初めて見た気がするのにや。あ、そういうえば『気に入らないのと遭遇した』とか言つてたけど…………なんの事だろう？

両腕で枕を抱きつつゴロゴロと寝転びながら考えていたら、夏煉が帰つて來た。

「ただいま戻りましたあ～」

「あ、お帰りい、どうだつた？」

「ええ、無事に終わりましたよ。ただ、ちょっとだけアクシデントがありましたが……」

「アクシデント？まあ、深くは聞かないでおくけど……お疲れ様にや」

「はい……ありがとうございます……」

労いの言葉を受け取つた夏煉は、ポケットから回収した悪魔の駒4つを机に置いた。因みに私の駒と今まで倒したはぐれ悪魔、そして今回のも含めて計24個の駒がズラリと並べられていた。てゆーか……あれ? 今気づいたけど、今回は一匹だけの筈なのに夏煉が置いた駒は兵士3つと戦車……なんか、今は聞くの怖いから、後で聞いておこつと。

そう考へてゐると……

「黒歌さん…………」

「え？ 何、どうかしたの？」

「黒歌さん、その……お、お願いがあるんですけど……今日だけ一緒に寝てもらえませんか?」//

なんと、夏煉が頬を赤く染めながら共寝をお願いされた。  
何、この娘……超可愛い!!

「べ、別にかまわにやいけど……どうして？」

「えっと、その……たまには一緒に寝て上げても良いかなって思ったんです。ほら、時々黒歌さん……私のベッドに潜り込んでくるでしょ？」

「え？ あ、ああ……そ、そうにやんね」

「それで……黒歌さんの匂いとか温もりとかが……頭から離れなくつて……ああ！ もう、私、変になつちやつたのかな？ ドキドキが止まらないよお……！」

ま、まさか……おふざけ半分でやつた事がこんな所で出てくるなんて。まあ、夏煉を抱き締めてるとフニユフニユな柔らかい感触で飽きないと思つてたけど……

それと同時に胸がバクバクしてるのが感じる。これって……恋なのかにや？

「く、黒歌さん……」 //

心の熱さを感じていたら、夏煉がアツい視線を向けた。

「は、恥ずかしいから一度だけ言いますね？」

「私を抱いてもらえませんか？」

ブチツ！

私の中で、ナニカが切れると同時に……

「夏煉、先に謝つておくね…………ゴメン!!」

「キヤツ!?」／＼＼＼

私は夏煉を本能のままに、ベッドへと押し倒した。

鬼崎 s i d e

「そ、それで……一緒に寝るどころかどういう流れかアレして一夜過ごした…………と…………？」

『は、はい…………』

僕は今、猛烈に動搖していた。近況報告を聞く為に繋げてみると……画面には服が辺りに散らばり、生まれたままの姿で互いに抱き合っていた義姉<sub>夏煉 黒歌さん</sub>と猫又が映し出されていたからだ。

ま、まさか夏煉が……あの純粹無垢な義姉が隣にいる猫又……しかも女性と一夜を過ごしてしまったなんて動搖しないほうが異常だ。なにより、この場に義姉さんが居ないのが都合が良い。もし、この惨状を見れば暴走の確率が高いし、積極的に変な事を聞いてくるから始末が悪い。

ま、まあ？僕だってソレくらいは受け入れるし、義姉さんのアレな性癖だつて気にしてない。けど…………けど！これはどう受け止めて良いのか困惑するじゃないか!!せめて夏煉には、平常の恋愛をして……いや、そもそも夏煉に彼氏ができて……その彼氏がどうしようもない下衆なら百回はなぶり殺す。全総力を持ってね？

でも、此処で黙つて悩んでいても変わらないし、僕も一人の男かつ夏煉の義兄だ…………どうやら、覚悟を決めるしかないようだね。

「まあ、最初に目撃した時は驚いてどうしようかと思つたけど……黒歌さん？夏煉を寝とつたからには、やる事はわかつてますよね？」

『…………え？』

「それと夏煉、自分で撒いた事はしつかりと責任持つてやるんだよ？」

『え？ よ、陽太義兄さんは怒つてないの？ 私達がした事を…………』

「ああ…………もう、そんなのは義姉さんで流石に慣れたよ。それに、僕も君達の関係を否定するつもりはさらさら無いし、むしろ干渉するつもりもまつたく無い。まあ、スカーレット様が聞いたらどうなるかわからぬけど…………上手く言つておくさ」

『は、はあ…………』

二人は怒られるかと思つていたのだろうか、あまりにも受け入れられた事に啞然としていた。

「それじゃあ、後は一人がどう決めるか話し合うように…………じゃあね」

そう告げて通信を切ると、目を閉じつつため息を盛大に吐いた。やれやれ、僕も浅ましくなつたな…………義妹の同性愛を受け止めるなんてね。慣れというのは恐ろしい…………

夏煉 s·i·d e

「ね、ねえ……夏煉。これつて大丈夫つて考えてもいいんだよね？」

「そ、そうみたい……ですね……黒歌さん」

昨夜の黒歌さんとの事を、陽太義兄さんに知られた時は否定される

と思つていたけど……何故か予想の斜め上で、それを受け入れられた事に唖然としてしまつた……

でも、それと同時に不思議な安堵感があつた。確かに昨日は変態に遭遇してイライラしたり、仕事が度重なつて疲労が取れなかつたり……思いもよらない所で知り合いと遭遇したり…………もう沢山ありすぎてどうして良いか、わからなくなってきた。

だから、これは陽太義兄さんやスカーレットさんの為だと自分に言い聞かせた。でも、その反面……背負う重みに耐えきれず、逃げ出したいと考える事もあつた。

大好きな陽太義兄さんに甘えたい、陽太義兄さんに慰めてもらいたい…………けど、この世界に陽太義兄さんや城の皆は居ない。私一人……そんな孤独感に私は狂いそうだつた…………

でも……そんな時、黒歌さんの顔が頭によぎつた。猫の様に身体をくつついできたり……ベッドに潜り込んできたりと大変な事になつていてたけど……黒歌さんは何時だつて私の側に居てくれたのだと感じた。

だから、黒歌さんに甘えてみようという選択をした。

けど……その代償は高く、同性と一夜を過ごした事になつてしまつた。でも、不思議と嫌な感じはせず……むしろ心の隅にあつた穢れが消えるのと、一人じやないという幸福感を感じられた。（でも、少しだけ獸の様に荒れに荒れてる黒歌さんに興奮と快感を覚えたのは……私だけの秘密です♪）

そして一夜が明けて、現在に至ります……

唸然とした空気を破る様に黒歌さんは咳払いをしながら頬を赤らめつつ、私に恥じらいの眼差しを向ける。

「か、夏煉…………あの、昨日はゴメンね？その、あまりにも夏煉が力ワイつくて襲つちやつて…………」//

「い、いえ……元を正せば私が『一緒に寝たい』って言つちやつたから…………その…………」//

「…………ねえ、これはお互い様つてことにしにやい？」//

「…………そ、そうです…………ね」//

「…………」「

そうして、沈黙が続き…………私は腹を括つて黒歌さんへと顔を向ける。それと同時に黒歌さんも決意をした表情になり私にまっすぐ顔を向けた。

「黒歌さん…………」

「夏煉…………」

「……、これから…………お付き合いの方を宜しくお願ひいたしま…………痛あツ!?」

私が意を決して放つ言葉と共にお辞儀をすると、黒歌さんも同じタイミングでお辞儀をした。その直後、額と額が軽くぶつかる。ちょっと痛い…………つて、え？

「…………」

「…………」

「「ふつ……あははは！」」

同じタイミングでの告白の言葉に、私達は思わず笑ってしまった。

「はあ～……なんにや、夏煉もおんなじこと考えてたんにやんね？」

「はあ～　はあ～…………それは、私の台詞ですよ。もお～」

「でも…………なんか嬉しい」 //

「…………はい」 //

そうして、黒歌さんと無言で見つめあつていると……空間から眼魔眼魂が現れる。

もう、良い所なのに…………

そんな事はお構い無しだとばかりに、眼魔眼魂の瞳から駒王町の全体地図が映し出される。そして、とある建物に4つの黒い羽のマークが点滅していた。まさか……！

マークが点滅している場所を覚えた私は、無言で立ち上がりつて身支度をする。そんな中、後ろを振り返ると黒歌さんが心配そうに見つめていた。

「行くんだね、夏煉…………」

「ええ、これが私に与えられた仕事ですから…………大丈夫ですよ、黒歌さん。絶対に帰つて来ますから」

そう笑顔で告げて、身支度を終えた私はドアへと向かおうとした。

その時……

「夏煉」

「どうしたんですか？黒歌……んむうツ！」

声をかけられて、振り向いた瞬間……黒歌さんが私を強く抱き締めて唇を重ねた。

そしてキスをしてから2分辺りで、離してくれた。

「ふはあ……にやふふ、私からの祝福のキスにやん♪」

「はあ、はあ……あ、ありがとうございます……」

「ふふ……頑張つてね？」

「……はい、いつてきます」

そして、私は黒歌さんに一時の別れを告げ…………部屋を後にした。ホテルの廊下を歩いていると、懐から黒と赤色の眼魂と漆黒の眼魂が出てきた。

『見ておつたぞ娘？お主、あの猫又と夜伽を通して……』

「羽衣狐さん…………これが私の選んだ道です。だから……」

『皆まで言わなくともよい…………妾はそなたが進む道を見守り、支え、そしてこの強大なる力を…………娘、そなたの思うがままに使うがいい』

「ありがとうございます…………」

『ふつ……しかし、お前が恋路に現を抜かして己が進む道を違え、踏み外した時は……私は迷わずお前を斬る。仲間だろうが、なんだらうがな』

「わかつているよ、焰……もし、そうなつた時は私も全力で斬る。それが例え、理解してくれる一番の友達でも……」

『友達……か。聞こえは言いが、一つ間違つていいぞ? 共に戦い、共に競い……そして共に限界の先を高め合う……私達は仲間だ、絶対なる最強を目指す者同士のな?』

『焰……なら、今回は羽衣狐さんと一緒にお願いしようかな?』

『ふむ……今宵は良い余興が見れそうじゃな?』

『ああ、荒れに荒れまくつてやる!!』

「ふふ…………さあ、墮天使鳥狩りの始まりだよ」

私は悪戯心に満ちた子供の様な笑みを浮かべつつ、墮天使達が潜伏している場所へと向かつた。

## E p i S o d e 8

夏煉 s i d e

以前、アザゼルさんからこの町に墮天使四人が潜入り、その処理を依頼された私は眼魔眼魂を町中に放ち、その行方を探っていた。

そして、隠れ家と思わしき廃教会へとたどり着き……敷地内へと足を踏み入れる。

『娘よ、此処が鳥共の根城か?』

「はい、悪魔達は教会が天使の拠点だと恐れて誰も寄りつきません。だから連中は、それを見越して選んだんだと思います」

『なるほど……どうやら、向こうから姿を現したようじゃな? 数は三羽くらいか』

『ふむ……どうやら、向こうから姿を現したようじゃな? 数は三羽くらいか』

羽衣狐さんの言葉通り……私の目の前には黒のスウェードハットをかぶり、長い灰色のコートを羽織った中年男性と青みがかかつた長い黒髪でボディコンスースをまとつた美女、そして赤髪のサイドテールに白黒のロリータ服を着用した少女が現れる。しかも三人は、背中に黒い翼を生やしていた。

「ありやりや、なんか人間のガキンちよが一匹迷いこんで来ちゃつたんだけどお……どうすんのドーナシーク?」

「ふん、所詮は下等生物だ。殺してもどうという事は無い」

「それもそだね、てな訳で……バ・イ・バ・イ!!」

赤髪のサイドテールが左手から光の槍を形成させて、私目掛けて投擲する。でも、私はそれを一步後退して回避した。

「なつ！ ちょっと冗談でしょ！？」

「何をしているプレティオ……たかが人間の小娘だぞ」

「そんなことわかつてますう！ さつきのマグレッショ、マグレ!! それなら、コレはどう防ぐのよ!!」

サイドテールは、今度は両手に二本の槍を形成させて駆け上がりながら接近する。

私は焦ることなくゴーストドライバーを出現させ、ヘレナ眼魂をセットする。

『アーカー！』

「ツ!? ウツそ！ な、なにそ……ゴハツ!?」

「なつ！ プレティ……グツ!?」

「きさ……グオツ!？」

ゴーストドライバーからヘレナゴーストが出現し、迫る赤髪サイドテールの腹部に突進して吹き飛ばした後に残りの二人にも体当たりを浴びせる。そして、私の元へと舞い戻った。

『バツチリミトケー！ バツチリミトケー！』

「変身」

『カイガン！ ヘレナ!! デッドゴー！ 覚悟!! キ・ラ・メ・キ！ ゴースト  
!!』

レバーを操作し、私はヘレナへと変身する。その後にドライバーに手を翳し、ガンガンハンドとは別に黒色を基調とした両刃剣【ガンガンセイバー】を装備し、身構えた。

「痛つたア～……ちよつとおツ！ さつきのは痛……つて、なにその姿!? ア～アンタ、まさか神器使いだつたん訳!!」

「だつたら?」

「はっ！ 丁度良いじやん。神器使いなら、アンタをぶつ殺してその神器をアタイのモンにするだけさ!!」

「殺れるなら殺つてみなよ」

「上等!!」

サイドテールは両手に持った槍を投擲した後、次々と光の槍を形成して私へと投げつける。私はガンガンセイバーで最初に投げられた二本の槍を叩き斬った後、次々と迫る槍の雨を斬り捌いていく。斬り捌かれた光の槍は、地面に突き刺さると同時に霧散していく。そして、槍を捌きながら私はサイドテールの目の前に接近しセイバーを袈裟羅ぎに振り落とした後、腹を蹴りあげる。

「ツ?! ガハッ!!」

振り落とされたセイバーの斬撃と蹴りをモロに浴びたサイドテー

ルは後退りながら、斬られた箇所を抑える。

「ちつー調子にのんなつづーの!!」

「逃がさないよ」

サイドテールは睨みながら叫ぶと、背中の翼を使って空へと飛び上がりうとする。私はそれを見逃さずに、瞬時に後ろへと回り込んでジャンプで飛び上がり、セイバーで翼を両方斬り裂いた後、踵落としを食らわせて地面へと叩き落とす。

「ガアツーく、くそッ…………え？」

地面へと激突したツインテは自分の背中にあつた筈の翼が切断されていることに気づいた。

「う、嘘…………ウソウソウソウソウソウソウソウソオオオツ!!??ア、ア  
タイの翼…………アタイの墮天使としての象徴があつ?!?」

翼を切断されたことがよっぽど致命的だつたのか、ツインテは頭を抑えて泣き叫ぶ。

ああ…………なんて、心地の良い響きだろう…………相手がもつとも大切にしているモノを完膚無きまでに踏みにじつて、壊された本人が抗えない現実に絶叫し、希望そのものを挫かれ、心の底から絶望する姿を眺める。煉獄義姉弟私達にとつてはこの上ない幸福…………！

「よくも…………よくもよくもよくも！アタイの墮天使の象徴を、よくもおおおおおおおおおおおお!!!!」

サイドテールは涙を流しながら、両手に光の槍を形成させ突進してくる。私はそれを迎え撃つべくガンガンハンド同様に、ガンガンセイ

バーの鐔に刻まれた目玉模様をゴーストドライバーに翳してアイコンタクトさせる。

『ダイカイガン！ガンガンミイヤー!!ガンガンミイヤー!!』

「死ねええええええツ!!!」

「残念だけど……此処で散るのは貴女だよ？」

『オメガブレイク!!』

ク イ レ ブ オ メ ガ

私の背後に目の紋章が出現し、ガンガンセイバーの刀身に黒紫色のオーラが収束する。そしてすれ違い様に槍を交わし、サイドテールの腹部をガンガンセイバーの斬撃で切り裂いた。

「そん……な、レ、レイナーレ……様……！」

斬られたサイドテールは両手に持った光の槍が霧散し、力無く膝をつきながらうつ伏せに倒れ爆散した。

私はガンガンセイバーを血振りの原理で、力強く斜めに振るう。そして、後ろを振り返るとそこには先ほどの戦いを見ていたツインテの仲間が驚いた表情で私を見ていた。

「バ、バ力な……たかが人間の小娘如きにプレティオガツ!?」

「どうやら、ただ者では無い事だけは確かだな……カラワーナ、同時攻

撃で仕掛けるぞ!!』

「ああツ！」

二人は光の槍を形成し、翼を使って上空へと飛び上がった。すると、懷から羽衣狐さんの眼魂【D02・ハゴロモギツネ眼魂】が私の目前に漂う。

『娘、妾を使え。鳥で遊んでもおくのも悪くは無い』

「わかりました」

私はそう言いつつ、右手へ収まつた眼魂のスイッチを押すと、瞳の絵柄が変わり数字の『02』が浮き上がる。

そしてゴーストドライバーのバッклを開いて中にあつたヘレナ眼魂を取り出した瞬間、今着用しているパークーが消滅して、何も描かれていないフェイスに紫のラインが入つたボディースーツの素状態『トラジエント』になる。

そして、スイッチを押したハゴロモギツネ眼魂をゴーストドライバーにセットしてバッカルを閉じた。

『アーカー！バツチリミトケー!!バツチリミトケー!!』

その音声と共に、中枢からヘレナゴーストとは別のパークーゴーストが出現する。

それは漆黒のセーラー服をモデルとし、後ろの裾には白銀に煌めく狐の尻尾が九本生えたパークーだった。

そしてパークー『羽衣狐ゴースト』が出てきた瞬間に、レバーを勢いよく引いて押し込んだ。

『カイガソ！ハゴロモギツネ!!魅惑の妖狐！統べるは漆黒!!』

音声が鳴り響くと共にパークーを羽織ると、裾にある九つの尻尾【ミスティックナインテール】がまるで命を吹き込まれたかのようにゆらりゆらりと妖しく揺れ動き、パークーからは黒色のオーラが溢れ出てくる。そして何も描かれていないフェイスには、二本の角と共に九本の尻尾を持つた狐の後ろ姿で顔を形成した絵が描かれる。

「な、なんだあれは!?」

「姿が……変わつただと!?」

「仮面ライダー・ハゴロモギツネ魂」

『さあ、鳥共。今宵に煌めく月の様な派手な余興を見せておくれ……』

羽衣狐さんがそう告げた後に右から2つ、3つ目の尻尾から黒一色の鉄扇と煌びやかな装飾が施された刀が現れると私は右手に刀を、左手には鉄扇を装備する。

【二尾の鉄扇】、【三尾の太刀】……！

『これは妾が愛用する武具の一つ。さあ……精々、我等を楽しませておくれよ?』

「ふん、何を出したかと思えばとんだ虚偽威しだな?」

「扇と刀だけで……何が出来る!!」

コート男と美女は勝ち誇った表情をしながら、持っていた光の槍を私目掛けて投擲する。私は左手に持つ鉄扇を構えると、瞬時に巨大化して投擲された光の槍を防ぐ。光の槍は鉄扇の扇面にぶつかると

粉々に碎け散りながら霧散する。

「なつ!? そんなバカな!」

「もう終わり? なら、今度は此方の番だね……」

「フツ……だが、上空にいる我々にどうやつて攻撃する気だ? まあ、踏みしめている地面が似合う下等生物には、空を飛ぶ等無理な話だがな?」

「飛べるのは、貴方達だけの専売特許じゃない……」

私は鉄扇を元のサイズへ戻し、その場で軽く扇ぐ。すると、私の周囲に突風が発生し私はそれに身を纏い、そのまま上空にいる墮天使達の元まで飛び上がる。

「ハアアアアアアアッ!!!」

「なつ!? は、速……ガアツ! グアアツ! ?」

「ド、ドーナシー……グブツ! ガハアツ! ?」

そしてつむじ風を纏つた状態で、墮天使達の周囲を高速で飛び回りつつ鉄扇を少しだけ大きく伸縮させ、太刀には紫電を纏わせる。そして、すれ違いざまに鉄扇による打撃をコート男の墮天使に、太刀による斬撃を美女の墮天使にと何度も浴びせ続ける。そして、一通りなぶり終えた後にミステイックナインテールで地面へと勢いよく叩き落とす。

墮天使二人が墜落すると同時に、私も突風を霧散させ地面に着地する。

「ガツ！……わ、私達……至高なる堕天使が、こんな人間……如きに圧倒されるなど……！」

「グツ……認めん、認めてなるものか……！」

『満身創痍な身であるにも関わらずまだ立ち上がるか……しかし、少しは楽しめると思うたがこう手応えが無さすぎる』と、案外つまらぬな？』

「それなら、私がこの二人を使つて羽衣狐さんに“面白いモノ”を見せてあげますよ」

『ほお……娘にしては気がきいておるではないか？では、そなたが言うその“面白いモノ”で妾を楽しませてみよ』

「わかりました」

私はそう呟くと同時にミステイックナインテールでレバーを操作し、必殺技を発動させる。

『ダイカイガン！ハゴロモギツネ！オメガドライブ!!』

「……フツ！」

「なつ!? グツ……うつ……わ、わあああああッ!!?」

「カ、カラワーナッ!!」

私は鉄扇に黄緑色のエネルギーを纏わせた後、大振りに扇いで巨大な龍巻を美女の墮天使へとぶつけ、上空に吹き上げる。

そして、龍巻に呑み込まれた墮天使が煌びやかに光る三日月に背を

向けた状態で必死にもがき続ける。そして太刀の刀身に炎を纏わせた後……

「ハアツ!!」

オ

メ

ガ

ド

ラ

イ

ブ

「ぐああああああああああッ!!」

私は勢いよく太刀を振るつて、巨大な炎の斬撃を放つ。そして斬撃は吸い込まれるように竜巻へと迫り、美女の墮天使を縦一閃に両断させ、花火の如く爆散した。

『ふむ……煌めく月を背景にし、鳥による花火で派手さを演出したか。流石は妾達が見込んだ娘そやつ……で、その残った鳥はどうする気じや?』

「…………ん?ああ、そうですね…………」

私は仮面の下にこやかな笑みをこぼしつつ、残っているコート男の墮天使に視線を向ける。

さて、どうしようか…………あ、そういうえば以前、陽太義兄さんと一緒にとある世界で…………よし、あの技に挑戦してみようかな?

私は鉄扇と太刀を尻尾に収納し、4つ目の尻尾から十字型の刃が先

端にある長槍が現れ、装備する。

【四尾の槍　　“虎退治”】……さて、貴方には特別な技で葬つてあげる」

「くつ！貴様如き人間に……おめおめと殺られてたまるものかあああッ!!」

コート男の墮天使は両方の手に光の槍を形成させ、翼をはためかせて飛行しながら私へと迫り、槍で突き刺そうとする。

それに対し、私はもう一度レバーを操作して必殺技を発動し、槍の先端にある十字の刃に禍々しい赤黒いオーラを纏わせる。

『ダイカイガン！ハゴロモギツネ!! オメガドライブ!!』

「さあ……我に刃を向ける墮ちし天使よ、今こそ煉獄による裁きの時。慈悲と憤怒は業火の刃となり、貴殿の全てを刺し貫き……その魂を輪廻の核まで燃やし尽くそう……  
【煉獄の極刑】!!

オメガ  
ドライブ

獄の煉  
獄  
刑

その詠唱と共に槍の刃を地面に勢いよく突き刺した。

その直後、突然私の周囲に禍々しい赤黒い十字槍が次々と出現し

……その槍は意思を持つかの様に飛び出すコート男の頭、胸、腕、脚、翼……身体のありとあらゆる部位を刺し貫いた。

「ガアアアアアッ！？！？！」

幾つもの槍に身体の全てを貫かれたコート男は悲痛な叫びを上げながら悶え苦しみ、そして青い炎に全身を焼かれ……塵と化して無に帰した。

コート男の最期を見届けた私は槍を引き抜いて、ハゴロモギツネ魂から元の形態であるヘレナ魂へとゴーストチエンジする。

『娘、先程の技はかの有名な串刺し公の……』

「ええ、ルーマニアのワラキアの領主で「ドラキュラ竜の子」と恐れられている『ヴァラド三世』。あの人の宝具を私なりにアレンジしてみたんです」

『ふむ、それより娘よ……今宵の主が見せてくれた余興は、実に楽しかった。これからも日々、精進するが良い』

『はい……お褒めにに預かりまして光榮でござります』

羽衣狐さんからの言葉を、私はありがたく受け取った後……廃教会の中へと入つていった。

ヘレナこと夏煉が下級墮天使のドーナシーク、カラワーナ、プレティオの三人を葬った同時刻……

廃教会内では、巨大な十字架が立てられた祭壇の前で長い黒髪に美しい顔、男性の誰もが惹かれる妖艶なスタイルを持ち。そして、それを主張するかのように露出度が高い黒のボンテージを着用し、背中に黒い翼を生やした女性が佇んでいた。

彼女の名はレイナーレ……墮天使組織『神の子を見張る者』に所属している下級墮天使である。

レイナーレは目の前にある十字架の祭壇を眺めつつ、残酷な笑みを浮かべる。

「もうすぐ…………もうすぐよ。もうすぐあの娘が此処に来れば、私はアザゼル様とシェムハザ様のような【至高の墮天使】に……！アハッ、アハハハハハハハハハハハハハツ！」

“至高の墮天使”……レイナーレはその言葉と共に高々と狂い笑う。

レイナーレの目的……それは、数日後に駒王町へと訪れることになつている破門されたシスター『アーシア・アルジエント』が宿す神器『聖母の微笑トワイライト・ヒーリング』を抽出して、自分のモノとし組織のトップである総督のアザゼルと副総督のシェムハザから寵愛を受けることである。

「…………それにしてもドーナシーク達は遅いわね、もうすぐ神器抽出の術式が完成するというのに……ん？」

レイナーレは、一緒に連れてきた三人が一向に帰還しないことに疑問を抱いた直後。突如として後方から強い気配を察し、後ろを振り返る。すると出入り口の扉がゆっくりと開き、謎の人物が中へと足を踏み入れた。

中へと踏み入れたその人物は、先程レイナーレの部下であるドーナシーケ等三人を葬った紫鬼の戦士……ヘレナこと鬼町 夏煉であった。

### 夏煉 s i d e

扉を開け、廃教会内へと足を踏み入れた私が最初に遭遇したのは長い黒髪に際どいボンテージを着用し、先程の三人同様で背中に黒い翼を生やした女性だった。

おそらく、今回の首謀者に間違いないことと……さつき斬り捨てたツインテが口にした『レイナーレ』という人物だと悟るが確信が得られない……

少しだけ鎌をかけてみようかな？

「……【神<sup>グ</sup>の子<sup>レ</sup>を見張<sup>ゴ</sup>る者<sup>リ</sup>】の下級堕天<sup>リ</sup>天使、レイナーレ……で間違いないよね？」

「ツ!? ど、どうして私の名と神<sup>グ</sup>の子<sup>レ</sup>を見張<sup>ゴ</sup>る者を……そ、そういう貴女は何者よ!?」

ビンゴ！ こうも簡単に当たるなんて、今日は運が良いな。

「答える義理は無い。なぜなら貴女も、仲間の元へ逝く運命にあるのだから……」

「仲間……ツ！ 貴女、まさかドーナシーク達を……!?」

「ゾ明察。さあ、私と戦つて華々しく潰えるか……それとも大人しくその命を差し出すか、2つの選択から1つ選んでね。勿論……拒否権は無いし、逃げても無駄だから」

「くつ……フツ！ だけど、貴女も選択を誤ったようね？」

「？」

険しい表情から一瞬、余裕な笑みを浮かべるレイナーレの言葉に疑問も抱いた直後……突然私の周りに修道服を着用し、ビームサーベルを装備した大勢の神父達が囮んで退路を塞ぐ。

「アハハハハツ！ 一人で此処に乗り込んで来た事こそ貴女の敗因！ さあ、エクソシスト達よ其所に居る愚か者を殺しなさい！」

『ハツ！』

レイナーレが神父達に指示を出すと、私を囮んでいる全員がビームサーベルを構えて臨戦態勢をとる。

それに対し、私は懐から焰の眼魂【D01・ホムラ眼魂】を取り出した。

「出番だよ、焰……」

『ふつ、待ちわびたぞ……この時を！』

その言葉と共に眼魂のスイッチを押すと、瞳の絵柄が変わり数字の『01』が浮き上がる。その後、コーストドライバーのバッклを開いて、中へと入っているヘレナ眼魂をスイッチを入れたホムラ眼魂と

入れ替えてバツクルを閉じる。

『アーカー！バツチリミトケー！バツチリミトケー！』

その音声と共に、ゴーストドライバーから赤色の薄いラインが入った黒を基調としたセーラー服をモデルとし、フードの後頭部には白い髪止めとポニーテールのようなモノが靡き、両肩にはそれぞれ三本の刀を、そして背中には緋色の長刀の計七本の日本刀を背負つたパー カー……『焰ゴースト』が出現する。

そして焰ゴーストが上空へと舞い上がった瞬間……私は左手で印を結びつつ、右手でトリガーを操作しながら口を開いた。

「忍……転、身」

『カイガン！ホムラ!! 目指せ最強！ 逆の六爪!!』

炎の渦が私の身体に巻かれると同時に音声が鳴り響き、上空からパー カーが降下し羽織る様に被さる。そして炎が消え、何も描かれていないフェイスには、二本の角と共に六本の刀で顔を形成した絵が描かれる。

その後、ドライバーに右手を翳してガンガンセイバーを取り出して装備し、レイナーレへと視線を向ける。

『そ うい え ば 貴女は……さつき 私が誰かを聞いた時に『答える義理は無い』と返したけど……冥土の土産つて事で特別に教えてあげる』

その言葉の後、セイバーを構えつづレイナーレを含めた全員へとモノ凄い殺氣を放つ。

「煉獄の紫鬼、仮面ライダーへレナ」

『秘立蛇女子学園五人衆が一人、焰』

「『渾沌／惡の定めに舞い殉じる!!』

殺氣を前にして怯んでいたレイナーレは、私達の名乗りで咄嗟に我へと返る。

「しょ、所詮相手は唯一人！さあ、何をボーッと突っ立つているの!? さつさとソイツを始末なさ……」

レイナーレが神父達に命令する刹那、私は常人離れした速度で神父達の包囲網をかいくぐり……

「き、消え……ッ!!??」

そして、一瞬にしてレイナーレの目と鼻の先まで近づくとガンガンセイバーを顔へと突き立て、そのまま貫こうとする。

が、レイナーレはその攻撃を頭を少しだけギリギリ動かす事で紙一重にかわす。かわした瞬間にすれ違はずまで……

「震えてるの?」

その言葉を耳元で囁きながら、振り返った直後にセイバーを振り上げ、のけ反っている最中に背後へと振り下ろし……連続で斬撃を浴びせる。

「ガハッ!!（い、一瞬すぎて何も見えなかつた……）この速さは人間の域を……いえ！その先を遥かに越えている！……そんな馬鹿な事が!!）……くつ！何をボサツとしているの!? さつさとソイツを片付けなさい!!」

レイナーレは苦い顔をあらわにしながら翼を広げて上空へと逃げると、神父達を仕向ける。

私は神父達から一旦距離を取りつつ、セイバーの刀身の一部を取り外して小太刀へと変形させ、【三刀流モード】へと移行する。そして、セイバーと小太刀を逆手に持ち替えながら上空へと飛び上がり、天井へセイバーと小太刀の刃を突き刺しながら両脚を折り曲げてぶら下がる。

その時、上空へと飛び上がつていたレイナーレが勝ち誇った笑みを浮かべながら、光の槍を形成する。

「やはり数では貴女が不利……恐れをなして天井に逃げるなんてやはり人間！この光の槍で貫いてあげるわ!!」

「別に逃げる為だけに天井へ飛び上がって、ぶら下がっている訳じゃない……貴女とこの場に居る全員を片付ける為の準備を整えていただけだよ」

「ハツ！下等生物が負け惜しみを！その身体に風穴を空けて……」

〔嵐脚 ランキヤク “乱” らん 〕！」

レイナーレの言葉が言い終わろうとした瞬間、私は両手に持つ武器セイバーと小太刀を力強く握り締めながら、両脚を高速で交互に蹴りあげる。すると両脚から扇状の衝撃刃が無数に発生し、地上にいる神父達へと放たれる。

私が放つたこの技は『嵐脚』。超高速の蹴りによつて衝撃刃を発生させ、前方に飛ばす六式と呼ばれる特殊な拳法の一種で、以前一輝義兄さんに教えてもらつて習得した技だ。

放された嵐脚の雨が地上にいる神父達はおろか教会の床に降り注ぎ、逃げ場を封じる。そして無数の嵐脚は地上へと直撃し、粉塵が舞いあがる。

「このツ！調子に……「嵐脚」！なつ！」

レイナーレが光の槍で攻撃する瞬間……私はセイバーと小太刀を天井から引き抜き、牽制として右脚による嵐脚を打ち放った後に着地する。

そして、レイナーレは即座に回避しつつ光の槍を幾千にも形成させ、私に狙いを定めて投擲する。

「食らいなさい!!」

「甘いツ！」

私はセイバーと小太刀の持ち手を逆手から順手へと戻した後、迫る槍の雨を二刀流で全て斬り捌く。そして、レイナーレが先程よりも一回り大きな光の槍を形成させ、私を貫かんと速いスピードで飛翔しながら接近する。それを私はセイバーと小太刀を交差させて防ぐも、武器同士の激突による衝撃で強く弾かれて後方へと突き刺さった。

セイバーと小太刀を失った私は静かに附せていると、レイナーレがここぞとばかりに歓喜の笑みを浮かべながら私を罵り、嘲笑う。

「アハハハハツ!!どう？これが至高なる墮天使である私の力!!武器を失い、丸腰の貴女にはもう何もできない！その背中にある刀も、どうやらお飾りみたいね!!」

「…………」

「あら、もしかして武器を失ったショックで声も出ないのかしら？流石は下等生物、何処までも愚かな貴女達は……私達人外には一生勝てないのよ。さあ、最後の慈悲として一撃である世に……「フフ……」ん？」

「フ、フフフ…………！」

レイナーレが私を蔑ましながら、光の槍を形成して一撃で決める瞬間。対する私は、仮面の下で含み笑みを浮かべながら小さく笑う。それと同時に焰も、私につられて小さく笑いだす。

『ククク、アハハ…………！』

『『アハハハハハツ!!』』

「な、何が可笑しいのよ!?」

「ハア～…………ゴメンなさい。ついね…………けど」

『ああ、これでやつと…………』

「『本気が出せる（そうだ）』』

その言葉と共に私は両手を背中に回し、両肩に背負う六本の日本刀【ゴーストシックスブレイド】の柄に人差し指、中指、薬指、小指の間へと挟んで勢いよく引き抜き、身構える。

「ツ!?な、何よそれ！その刀は飾りじゃなかつたというの!!??」

「ええ……この六爪流こそ、焰が使う本当の武器。最初にガンガンセイバーを使っていたのは、貴女にこの六爪を抜く価値があるかどうかを見極める為……そして」

『貴様は私達に六爪を抜かせた……本来ならお前はアレで仕留めれるぐらいの何処にでも居る唯の雑魚だったんだぞ?』

「雑魚？至高の堕天使である私を……唯の雑魚、ですって…………!?

レイナーレは光の槍を強く握り締めながら、顔を醜く歪ませて憎悪の視線を私達に向けた。よっぽど雑魚呼ばわりが嫌いなのかな？

「ふううううざけるなあああああツ!!至高の堕天使たる私を雑魚呼ばわりするなど万死に値するぞ下等生物ごときがアアアアアアアアアアアツ!!!」

『ハツ、おいおい……せつかく誉めているのに逆上は無いだろう？せめて六爪を抜かせたその“至高の堕天使”の片鱗くらいの価値を見せてみろ……露出烏女』

「ちよつと焰、言い過ぎだよ。まあ、雑魚ってのは事実だけどね？」

「きいいいさああまあアアアアアアアアアアアツ!!!!」

レイナーレは雑魚呼ばわりされ続けて、ぶちギレたのかさつき以上の速度で光の槍を投げつける。

それに対し、私は右に持つ三刀を振り上げて光の槍を粉々に斬り裂く。

「さて、もうお遊びはおしまい……」

『ここからは命懸けで獲りに行く!』

私は……いや、私達二人は刀をレイナーレへと突きつけながら尋常無い殺氣を放ちつつ構える。

「私の生き様、たっぷりと見せてあげる!」

『いざ、紅蓮の如く舞い散れ!!』

その掛け声と共に、私は高速で一気にレイナーレの元へと肉薄し両手に持つ六爪でバツ字に斬り裂く。

「ガツッ!」

「まだまだあツ!」

レイナーレがのけ反ったスキに、左の三刀で袈裟廻ぎで斬りつけた後に右の三刀による横一閃を食らわせて、腹部に力を込めた膝蹴りをめり込ませて上空へと吹き飛ばす。

「ガボバアアアアツ?!?!

『情けないなあ!お前は至高の堕天使なんだろ?だつたらその称号にふさわしい価値の片鱗を見せてみろよツ!!』

「な、ナメるな下等生物ガアアアアアアツ!!」

レイナーレは反撃といわんばかりに幾千もの光の槍を形成させて、私に目掛けて一斉に放つ。私は六爪を構えながら身体をギリギリまで捻り、その反動で勢いよく回転し襲いかかる槍の雨を瞬時に捌く。

『その程度か！』

「つまらないね？」

「この、バケモノがああああああツ！」

『『人外の貴女（貴様）にだけは言われたくないね（な）ツ!!』

私は勢いよく右足に力を入れて上空まで飛び上がり、レイナーレの目前までたどり着くと同時に右の三刀で背中にある黒い翼の片方を切り捨てる。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアツ!?」

翼の片方を切断され、コントロールを失ったレイナーレは地上へと落下する。

そして墜落したレイナーレはヨロヨロと立ち上がり、切られた翼に目を見開きながら動搖する。

「わ、私の美しい翼が……

堕天使の誇りである象徴があアアアアアアアアアアツ?!?!?き、貴様あアアアアアアアアアツ！よも、よくもよくも私達堕天使が最も誇りとして崇めている象徴をおおおおおツ!!!」

「知らないよ、そんな黒くて品がなきそうな汚い翼を切り落としたぐ  
らいで……もう、これ以上やつても無駄みたいだし…………そろそろ  
終わらせるよ、焰」

『ああ、コイツでは手応えが無さすぎる……』

堕天使の喚きに呆れを感じながら、私はトリガーを操作させて必殺技を発動させる。

『ダイカイガン！ ホムラ!! オメガドライブ!!』

〔ハアヽ・・・・・ツ！〕

ゴーストシックスブレイドに炎の渦を纏わせ、私は姿勢をギリギリまで低くさせながら六爪を握り締めつつ、さつき以上の速度でレイナーレの元へと一気に駆け出す。

「ヴエアアアアアアアアアアアアアアアアツ！せめて、せめて貴様だけでも道連れにして……！」

「貴女と一緒に死ぬ気はさらさら無い……私には家族として迎えてくれた皆、こんな私を信じて着いてくれた仲間達……そして、私の無事を祈つて、帰つて来て欲しいと願う大切な人が居る!!だから、私は死はないし死ぬ気も無い! 貴女の傲慢も、野望も、何もかも否定して……全てを斬り捨てるッ!!」

「『秘伝忍法  
【魁】  
!!』

レイナーレが光の槍を形成させて突き刺す瞬間、私はその攻撃を回避し縦横無尽に四方八方から斬撃のラッシュを浴びせ続けた後、レイナーレの目と鼻の先へと態勢を低くしながら抜刀術の構えを取る。

「ヒツーま、待つて……待つておねが…………！」

「『聞く耳持たん！ ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!』

魁

その叫びと共に六爪を一気に振り抜き、惨めつたらしく命乞いをするレイナーレをバツ字に斬り裂いた。

「下等生物ごときか……その下等生物の底力を侮つた事こそ、貴女の敗因だよ」

『フン、所詮は鳥の下級か。ああ、最期に伝えておくぞ……人間をなめるなよ?』

私はゴーストシックスブレイドを背中の鞘に戻し、ゴーストドライ

バーからホムラ眼魂を取り出す。

### 『オヤスマニー』

気の抜けた音声と共に変身が解除され、元の姿へと戻る。

そして、戦闘でますます荒れ果てた廃教会を他所に私はその場を去つた。

## E p i S o d e 1 0

小猫 s i d e

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ  
!!!!」

旧校舎にあるオカルト研究部の部室で、急に部長が憎しみで顔を歪ませて叫び声をあげながら怒りが爆発して部室を荒らし回った。まるで、大切なモノを壊されたかのように……その光景を見て咄嗟に、朱乃先輩と祐斗先輩が止めに入つた。

「お、落ち着いてください部長！」

「リアス、何をそんなに怒っているのですか!?」

「うるさいわねツ！せっかく墮天使達が潜伏している拠点を見つけて、ワザと奴等を泳がせた後に始末する算段だつたのに……それが全部台無しにされて終わつたのよ!?また、あのワケのわからない下手人の仕業によつて!!」

……えつと、私の推測が正しいのであれば。部長は前々からこの町に侵入した墮天使達に目を付け、拠点である廃教会を発見。だけど、教会は天使勢力の拠点であまり近づくのは評価に響くらしい……だから、自分の使い魔に墮天使達の動向を監視させ、決定的な証拠を目撃した処で全員を始末する作戦…………だそうですね。

でも、それは駒王町の都市伝説として新たに加わった『仮面ライダー』によつて計画は破綻したそうです…………

私は呆れながらも、聞こえるように呟いた。

「……あんまりそういうのに首を突つ込まない方が良いと思うんです

けどね？」

「……なんですか？」

「あれ、まさか部長……気づいてないんですか？この町の新しい都市伝説『仮面ライダー』について……」

「『仮面ライダー』？小猫ちゃん、それは一体……」

「今ネット中で噂となっている都市伝説『仮面ライダー』…………最近、廃墟や使われなくなつた建物に巣くう化けモノを狩る存在。そして、その化けモノに襲われそうになつた人がその仮面ライダーなる人物に助けられた事によつてネット中の話題に…………あの人はただ私達の仕事を請け負つているだけだと思うんですよ。墮天使の件だつて、私達が悪魔勢力だから無所属の自分が始末したと考えるのが妥当かと……」

「…………確かに、最近ははぐれ悪魔による被害も食い止められている訳ですし。リアス、彼を敵視するのは流石に良くないかと思いますわ」

「くつ…………それにしても小猫？貴女随分とその仮面ライダーの肩を持つんじゃないの…………貴女の主人である私と、下手人の仮面ライダー…………味方に選ぶのなら、当然主人である私よね？」

「私はどちらとも言えません…………ただ、今だけは仮面ライダーの味方であると考えています」

「で、でも！貴女はイッセー共々その仮面ライダーに襲われたじやないのよ！」

「そうだぜ、小猫ちゃん！」

「いえ、あの時……彼の手下かと思える黒怪人に手を出したのは兵藤先輩です。彼の正当防衛は達成されます…………それに、あの人を悪い人と認識するのは可笑しいと思います」

「そう告げ、私は帰り支度を整えて部室を出ようとする。

「ど、何処に行くのよ!?」

「……今日は気分が優れないので帰ります。では、また明日……」

「ま、待ちなさい小猫！話はまだ……!!」

部長の制止を聞かず、私は退室した。

夏煉 s i d e

「アザゼルさん、墮天使四名とその他に関与した全員の処理が完了しました」

『おつ、もう片付いたのかサンキューな。それでだが……どうやら連中がとある少女をこの町に誘導することがわかつてな。おそらくその娘の神器を奪うが目的だつたらしい』

「そうですか……それでその人の名前は?』

『“アーシア・アルジエント”……元は教会所属のシスターだつたんだが、倒れていた悪魔を回復系の神器で治療した事が知られて破門……流れ流れて、奴等の目に入つてこの町へたどり着くよう誘導されたようだ。ああ、安心してくれ……既に俺のダチがその娘を発見次第に保護してくれつから、お前さんが動く必要はねえよ』

「それなら助かります。それじゃあ、また……」

『ああ、お疲れさん』

あ的一件をアザゼルさんに報告し終えた私は、パソコンを閉じて……ベッドへと腰をかけながらある事を考えていた。

それは、黒歌さんが呟いていた【白音】についてだ。黒歌さんが時々、囁きながら寝言で呟く言葉……それが頭から離れずにいた。

もし、その【白音】が……黒歌さんがはぐれ悪魔となつた要因と深い関係がある事と……もう一つは、上手くいけば黒歌さんの苦しみを少しでも取り除けるかもしれない…………と、そう考えていると不意に：

「かあ～れえ～ん♡」

「?…どうかしましたか、黒歌さ……ん!？」

後ろから声をかけられた私は、振り向いてみると……其処には何も見につけていない素っ裸の状態で、ただ白色のエプロンを纏つているだけのいわゆる“裸エプロン”的格好をした黒歌さんが居た。エプロン越しでも黒歌さんのスタイルが抜群なのが出る所は出て、引っ込んでいる所は引っ込んでて……艶やかさを感じ取れた。つて、冷静に感想している場合じやなかつた!?何してるので、この人???

「く、黒歌さん？その格好は、一体……」

「にやふふ♡お仕事で疲れている夏煉を癒そうと考えてね？なりゆきでやつてみたの……そ・れ・でえ～？」

悪戯的な笑みを浮かべながら、黒歌さんは腰をふりふりと揺らしながら近づくと私の右手を引っ張って豊満な胸を触らせながら、つぶらな瞳で見つめ…………

「ゞ飯にする？お風呂にする？それとも…………ワ・タ・シ♡」

ズツキュウウウンツ！

その言葉がトリガーとなり、私は胸を触っている手を引っ込んで黒歌さんの肩を強く掴みながら、視線を向ける。

「そ、それじゃあお風呂で……お願い、します…………」

「うん、行こう♡」

「は、はい…………」

黒歌さんは笑顔で私の手を優しく握りながら、お風呂場へと連れていった。

「フフ……アハハハハハッ！ついに、ついに完成したツ!!」

断罪の地獄城にある開発施設で、僕はある発明品の完成に喜んでいた。資料室で偶然見つけたとある設計図を発見し、開発を続けて1ヶ月半の末に完成させた代物。

「さてと、この記念すべき自信作のテスト相手はどうしようか……まあ、近々テストはできるだろうぞ？」

僕はそう思いながら、ある発明品を持ちながら後ろに視線を向ける。それはティラノザウルスの頭蓋骨が象られている白色と、地層の内面が象られている黒色の小さなボトルが二本……そして、ティラノザウルスの頭部を模した斧と紫色で黄緑色の歯車が取り付けられた拳銃、そして赤色のバルブが装着された黒色の片刃剣が置いてあつた。

それを眺めながら、僕は抑えていた歓喜が爆発し高らかに悪く笑つた。

「ククク……アハハハハッ！アーッハハハハハハハッ!!ハアッ、ゲホッ!?ゴホッ!?ガホッ!?……やっぱり先生のマネをして、マツドサイエンティストらしい高笑いは出来ないな……はあ、僕も先生と同じ領域に立てるようになるには、よほど先になりそうだ……」

一通り笑い終えた僕はそう思いながら発明品を机に置いて、開発施設を去つて行つた。

# 1章 《幕間》

黒歌 side

夏煉がトレーニングに出かけた昼頃。私は浴室でシャワーを浴びながら、身体を隅々まで綺麗に洗つていて。

え？ なんでつて、そりやあ……トレーニング帰りの夏煉を私の艶やかなバスローブ姿で出迎えたいからに決まつてるじやにやい。

「るるんるるんるん♪にやにやんにやんにやんにやん♪にやふふ、もし夏煉が帰つて来たらビックリするだらうなあ♪？この前の裸エプロンの時も赤くなつてたし……もし、シャワー上がりのバスローブを見たら……にやくん♪ 考えるだけでハートがドッキュン、ドッキュンでアソコがキュンキュン《ピンポオーン♪》にや？んもおく……誰にやん？こんな時間に……」

夏煉の反応を想像しつつ、興奮に浸つっていた時に突然、インターホンが鳴り響く。もう、良い所にやのにな……

そう不満に思いつつも、浴室を出てバスローブを身に纏い、忍び足で近づきながらおそるおそるドアスコープを覗いてみると其の間に居たのは……

「にやにや!? お、お義兄様!?!」

「僕は君の兄になつた覚えは無いんだけどな……というか、開けてくれません？」

「あ、ゴメンなさい！ 直ぐに開けます！」

ビツシリとした灰色のスーツを着用した夏煉のお兄さんが居た。それも黒いケースを片手に持ちながら……私は咄嗟にドアの鍵を開

けて、お義兄様を出迎える。

「ど、どうぞ」

「お邪魔しますよ……というか、何故にバスローブ？」

「あ、ああ！シャワーを浴びてまして……丁度あがつた所なんです」

「…………ですか、夏煉は？」

「はい、トレーニングに出かけてますにや。それで、お越しになられた  
ご用件は？」

「ええ、実は…………黒歌さん、貴女へプレゼントを渡したくて」

「私に？」

お義兄様は微笑みながら頷くと、ケースをテーブルに置いて私に見せる様に蓋を開けると……その中には紫と金を基調とし所々に黄緑色の歯車が組み込まれ、銃口とトリガーの間に装填スロットがある拳銃と1、2、3と番号がついた赤いハッチとライドスイッチ、バルブが刀身に着き、逆刃にスコープが装着された黒い片刃剣……そして、青黒い歯車と赤黒い歯車が正面に組み込まれたクリーム色の機械でボトルみたいな形状をしたモノが2本入っていた。

私は拳銃と片刃剣をケースから取り出し、お義兄様は歯車が組み込まれたボトル2本を取り出す。

「あの…………これが私へのプレゼントですか？」

「はい……貴女が持っている拳銃が【ネビュラスチームガン】で、片刃剣が【スチームブレード】。そして……僕が持っている青黒い歯車の

コレが【ギアリモコン・煉】、そしてもう1つの赤黒いのが【ギアエンジン・獄】です」

「ネビュラ、スチームガン……」

「そのネビュラスチームガンは貴女専用に特別開発したモノで、仙術をネビュラエネルギーへと変換する機能が組み込まれています。そして、この【ギアエンジン・獄】、【ギアリモコン・煉】の順番でネビュラスチームガンのスロットにセットすれば、夏煉の様なパワードスームを装着する事も可能です」

「え!? わ、私も夏煉の様な『仮面ライダー』になれるんですか!?」

「ええ、ですが……正確に言えば仮面ライダーと同等の力が得られます。そして……」

そう言いつつ、お義兄様は私に真剣な眼差しを向ける。

「黒歌さん。これは僕からのお願いですが、この力で夏煉を支えて欲しいのです……いずれ、あの娘だけでは手に負えない強敵が現れる可能性があります。だから黒歌さん。夏煉が心を許し、愛している貴女に頼みたいのです。あの娘の……夏煉の……僕の大切な義妹の力になつてやつてください、お願ひします……！」

「お、お義兄様……！」

お義兄様はそう告げた後に私へ深く頭を下げつつ、夏煉の力になつて欲しいと懇願された。確かにこの先、夏煉一人じや対処出来ない事件が必ず起きる。

私を転生悪魔から元の猫又に戻してくれて……尚且つ一緒に居てくれた夏煉に恩返しもしたい。もし、あの娘に出会つてなかつたら

……私はずっと、独りだけの逃亡生活を送っていたかも知れない。

でも、今は違う！私も夏煉の支えになりたい。あの娘から助けられたこの命を……罪を犯した私を愛してくれた優しい想い人の為に使う！もう、二度と大切なモノを失いたくない！！

私はそう決意し、お義兄様の両肩を優しく置きながら声をかけた。

「お義兄様、顔を上げてください……」

「……」

「この黒歌、陽太郎お義兄様のお願い……引き受けさせていただきます。夏煉に救つてもらつたこの命……どうか、私が愛した想い人の為に使わせてください！」

「…………黒歌、さん…………フフ…………やはり、貴女にお願いして良かつた。どうか、僕等の代わりに彼女の事を宜しくお願ひします」

「はい、任せてくださいにや!!」

お義兄様は優しく微笑みながら、持っていた2つのギアを私へ手渡した後に空となつたケースを持つと背を向けながらドアノブへ手をかけ、私へと振り返る。

「それでは、僕はこれで失礼します。夏煉が帰つて来た時は伝えてください……」

「わかりました。お義兄様もお気をつけて……」

「（）心配感謝します……では、僕はこれで……」

そしてお義兄様は私にそう告げると、ドアを開けて退室した。

鬼崎 s.i.d.e

「良かつたね、夏煉…………良い人<sup>女性</sup>と巡り会えて……」

僕は高級ホテルを背にしながら歩を進めながら、小声で呟いた。

「さて、要件は一つ終わつたとして…………次は、実験だな」

そうして、ポケットからティラノザウルスの頭蓋骨を象つた白色のボトルと地層の内面を象つた黒色のボトルを眺め、ニヤリと笑みを浮かべつつ、歩を進めた。

## 第2章 戦闘校舎のPHOENIX

### E p i S o d e 1 1

夏煉 s i d e

あれから一週間が過ぎ、私は午後の自主トレを済ませ商店街へと足を運んでいた。

「さてと、今日のメニューは全部終わつたし……どうしようか……あ」

空いた時間をどう埋めるか考えていると、ゲームセンターへと立ち止まり……自動ドアに貼られている青色のモヒカンでメガネ越しの目付きが悪いスライムキャラがデカデカと描かれた壁紙の内容が目に入った。

『PERFECT PUZZLE パズルキング・トーナメント 参加者募集中!』……へえ、PERFECT PUZZLEがあるんだ……

『PERFECT PUZZLE』……それは、壁紙にデカデカとあるスライムの主人公『パラドクスライム』……通称“パラスラ”をメインキャラとし、様々な色のピースを組み合わせて繋げながら主人公を強化及びサポートしながら敵を倒すパズルゲームだ。

私はよくこのゲームをプレイしていて、スコアアタックでハイスクアを叩き出したことがある。

「何々……『トーナメントを見事に勝ち上がった優勝者にはパズルキングの称号及びゴールデンパラスラトロフィーと洋菓子店【GEN M】のスイーツ割引券5枚を、準優勝者には特大パラスラぬいぐるみ

と銀色のパラスラトロフリーをプレゼント!! 参加賞としてお好きなパラスラグツズを差し上げます』…………か』

パズルキングの称号と【GENM】の割引券…………か、悪くないかもね?

私は好戦的な笑みを浮かべながらゲームセンターへと入り、パズルキング・トーナメントにエントリーした。

そして、ホテルへと帰つて来た私は黒歌さんへパズルキング・トーナメントへの出場エントリーを済ませた事を伝え、ゲームセンターで拾つたパズルキング・トーナメントの内容が書かれたチラシを渡した。

『PERFECT PUZZLE パズルキング・トーナメント』ねえ〜? 私はジグソー・パズルの様な細かいのを組み立てるのは得意だけど……テトリスやぷよぷよの様なゲーム系は苦手かにやあ〜?』

「え、どうしてですか?」

「だつて最初辺りは余裕ができるてスッキリするからいいけど……次々と余裕が無くなつて最後は全部埋まつてゲームオーバー…………つてのがあるじゃん?まあ、夏煉はそういう閃きさがあるから、難なく乗り越えると思うけど…………ああ、それで……その、パズルキング・トーナメントだつけ? 夏煉はすぐにエントリーしたの?」

「はい、トーナメントは3週間後に開催されるらしいです」

「へえー」

黒歌さんは、ゴロゴロとベッドに寝転びつつ、パズルキング・トーナメントのチラシを眺めながら納得する。

そんな他愛の無い会話をしていると……

「あ、夏煉。眼魔眼魂が来てるにゃんよ？」

「え？ あ、本当だ……」

眼魔眼魂がいつの間にか、私達の頭上へと浮かんでいた。  
さて、本業にいきますか……

「それじゃあ、行ってきます」

「うん、気をつけてね？」

「はい」

私は黒歌さんにそう告げ、はぐれ悪魔の居る現場へと向かった。

私は使われなくなつたボウリング場へ到着するとヘレナへと変身し、はぐれ悪魔の搜索を開始する。また以前の様な人達が現れるとは限らないからね……

「さて、早くはぐれ悪魔を探さないと……」

搜索を開始して數十分が過ぎるが……一向にはぐれ悪魔を見つけられない処か、気配が掴めない。

可笑しい、眼魔眼魂の情報は確かにはずなのに…？

そう考えながら、足を動かす瞬間…………背後から殺氣を感じて後ろを振り返りながら、背後に迫るナニカを両手で掴み取る。

ニユルニユルとネチャネチャする感触と温さが両手から伝わりながらも、私はそのナニ力を強く引っ張る。

「フツ！」

『ニヨギヤギヤギヤギヤギヤギヤツ!?あ、あちきの舌ガガガガガガガガツ!?!』

その叫び声と共に、両手に掴んだナニカが姿を現す……それは、長いカエルの様な桃色の舌でその先には女性の身体で両生類の様な長い手足を持ち、グルグルと渦を巻いた尻尾を持つ……いわゆるカメレオン女の様な異形が苦しみながら現れる。

なるほど、カメレオン特有の保護色で姿を消していたんだ。道理で  
気配がしないと思えば……

「姿が見えれば此方のモノ…………オリヤアツ!!」

# 『ミギョギヤアツ!?』

私は両手に掴んだ舌を強く引っ張りながらカメレオン女を地面に叩きつけたり、背負い投げの如く浮かび上がらせて壁へと激突させたり、グルグル回りながら振り回した後で上空へと投げ飛ばす。

「これで……The Endだ！」

『ダイカイガン！ ヘレナ!! オメガドライブ!!』

私はカメレオン女を投げ飛ばした瞬間に必殺技を発動して右足に紫色のオーラを纏わせた後、飛び上がつて落下するカメレオン女目掛けてライダー・キックを食らわせた。

「タアアアアアッ!!!」

オメガ ドライブ

『ブギョバラバアッ!!??』

ライダー・キックを浴びたカメレオン女は奇声を発し、壁を2、3枚貫通させながらぶつ飛んで力無く倒れる。

そして、私はカメレオン女に近づいて背中から手を突っ込んで悪魔の駒を摘出する。摘出されたカメレオン女は、人間の女性へと姿を変える。

「今日は僧侶の駒か…………さて、此所に長居は無用。早く引きあげ……ツ!?」

倒れている女性を担ぎ上げ、その場から去ろうとした瞬間……突然強い気配を察知し、後ろを振り返ると以前とは違う紅色の魔法陣が出現すると……其処から噴き出した炎と共に金髪で赤色のスーツにワイシャツを着崩したホスト風の男性が現れる。

何、この人!?今まで感じた事の無い威圧感…………!!!

「やれやれ、人間界の観光がてらはぐれの気配がしたから立ち寄つて来てみれば……まさか、都市伝説で有名な『仮面ライダー』と出くわすとはね?」

「あ、貴方は一体…………ツ!?」

「おつと、これはまだ名乗つていなかつたな……失敬。俺の名はライザー、しない悪魔…………ライザー・フェニックスだ」

「ライザー……フェニックス……ッ！」

これこそ、私が初めてこの世界の強者と邂逅した瞬間だった。

## E p i S o d e 1 2

夏煉 s i d e

はぐれ悪魔との戦いを終え、帰ろうとした瞬間……突然として私の前にホスト風の男性……ライザー・フェニックスと名乗る悪魔が現れた。

見た目は少しだけイカつい風なホストの外見にも関わらず、その佇まいと雰囲気はこれまでのはぐれ悪魔や、レイナーレ一味の様な墮天使とは違う悠然でたくましく……そして悪魔であつても悪魔には無い異様なオーラを発していた。

私は目の前に居るライザー・フェニックスから放たれるその異様なオーラに対し……少しだけ警戒と共に恐怖を感じた。その正体が何かは知らないけど、とりあえず私ははぐれ悪魔であつた女性を抱えながら身構える。すると、ライザー・フェニックスは落ち着いた表情でため息を吐きながら、口を開いた。

「心配なさんな……俺さ、たまたまこの町を観光しに来ただけで、何も君と戦おうなんてこれっぽつちも考えちやいない。それに、君も俺と戦う為にやつて来た訛じやない……違う?」

「……」コクリ

「だろ?なら、さつさとその気を失っている女を連れて逃げる事だ。でないとあの小五月蠅グレモリい存在管理眷属者連中がやつて来るぞ?」

「……良いんですか、私を見逃しても?」

「言つたろ?別に俺は君と戦おうつて考え方じゃない……むしろ、俺は君の様なヒーロー存在を助けたい変わりモノさ……リアスの様な温室育ちと一緒にされちゃ困る。だけど、これだけは覚えておいて欲し

い。悪魔や墮天使の全員が人間を見下している奴等だらけじゃない、ちゃんと俺の様に人間や他の種族の事も視野に入れ、なおかつ共存を願う奴等が居るつて事をさ……』

「…………」

私はライザーさんの言葉には嘘偽りを感じず、ただ純粹で他種族との平和を願う心の広い人なのだとそう感じた。そう思っていると、ふと以前、陽太義兄さんが私に告げた言葉が頭に過る。

『良いかい夏煉？ 生きてる全ての誰しも、顔や外見だけで全て決めようとする思想が多い。そして、その反面で見てている相手の内面にある本性を見定められない可能性がある。だけどね、その誰もが全部そういうじゃない……ちゃんとその人の内面を見ようと考へ、理解しようとする人も居るんだ。それを覚えておくと良い……そうすれば、君の見えている世界の視野がより広くなるはずだよ』

……そうだ、人は外見だけで判断するんじゃない。その人の内面も視野に入れて善い人と悪い人とで判断しないといけないんだ。

ライナーレ達の様に人間や他種族を見下す者もいれば、アザゼルさんの様に他種族の平和を願う人達も居る……これは悪魔にも言える事だし、今日の前に居るライザーさんがその見習うべき人だ。

そう心で思つていた瞬間……突然、私とライザーさんから離れた場所で以前と同じ赤色の魔法陣が出現した。ライザーさんはそれをチラリと視野に入れると、バツが悪そうな顔をしながら舌打ちをした。

「おいおい、もう来たのかよ……仮面ライダー！ グレモリー眷属達は俺がなんとかして時間を稼ぐ。その間にその女を連れて出来るだけ遠くに逃げろ!!」

「ツ！はい、わかりました。それと……」

「えつ!? 何、手短にな！」

「貴方の様な悪魔<sup>人</sup>と出会えて良かつた。今度、お会いする時はいずれから早く行け！良いな!?」  
……」

「ああ、はいはい！お礼とかそういうのは何年も何百年も待つてやる  
それも……そうですね、ではいつかまた！」

私は深くお辞儀をしながらそう告げると、左手を目の前に翳す。  
すると眩い光で形成された円形のワープゲートが出現する。そして出現させたワープゲートをくぐり、私は瞬時に廃ボウリング場から宿泊しているホテルの入り口近くへと転移した。

いつかライザーさんと会つたら、手合わせをお願いしよう。と心に決めながら……

小猫Side

私は今日もオカルト研究部の活動で、はぐれ悪魔討伐の為に廃墟となつたボウリング場へと訪れていた。

今回の討伐対象はミーリヤメオンと呼ばれているB級のはぐれ悪魔。姿はカメレオンに似ていて、姿を瞬時に消す事が出来る迷彩能力を持つているらしいです。

まあ、部長の事だからこの討伐を期に挽回を図ろうと思つてるみた  
いですけど……

「…………」ブルブル

「(……やつぱりか)」

「え、えっと……」

「いま、せんね？はぐれ悪魔……」

「あらあら……」

案の定、はぐれ悪魔は何処にも見当たらなかつた。

考えられる可能性は二つ……私達が来るのを察知して迷彩能力で逃亡したか、仮面ライダーに倒されたか。

まず一つ目はあり得ない、それは悪魔には魔力が備わつてゐる。いくら優れた迷彩能力でも僅かな魔力さえ探知できれば、直ぐに発見できる。まあ、そんな類いが出来るのは私と朱乃先輩の二人だけだけど……魔力が一切、感じられない。

これで、二つ目の仮面ライダーに倒されたという可能性が確信できた。これまでの行動から察するに、あの人はこの地域全体に高度な情報網を持っている。それなら、はぐれ悪魔の出現場所や堕天使達のアジトを見つけるのは容易いはずだ。

そう思いながら、チラリと部長に視線を向けると……眉間にシワをよせながら表情を歪ませ、身体から滅びの魔力を放出していた。

「また……なの…………？」一体、一体あの仮面ライダーの目的は何なのよ!?私が治める領地を勝手に荒らしているだけでは飽き足らず、討伐対象のはぐれ悪魔を次々と狩り尽くし……擧げ句の果てには始末しようと泳がせていた忌々しい墮天使共を先に排除された!!どれだけ私の邪魔をすれば気が済むというの!?絶対に、絶対に許さない……!!

「（……浅はかな考えですね。たかだかはぐれ悪魔を倒しているだけ  
でそんなに怒らなくとも……あ、部長にとつてはこの位は評価に響  
くっていう思考でしたね。でも、もし仮面ライダーさんと出くわして  
も返り討ちに遭うのが目に見えるんですよ……）」

そんな部長の身勝手なワガママさに私は呆れるしかなかつた。でも、もし仮面ライダーさんと出会つて戦闘になつても、私達の惨敗が目に見えている。

この町に蔓延つていたはぐれ悪魔を1ヶ月で激減させ、侵入してい  
た堕天使をも処刑した相手に対し……私達は彼以上の戦力も実戦  
経験も劣つてゐる。明らかに向こうが有利でしか無いし、幾ら私達が  
束になつて掛かつても数分で全滅させられるのがオチだ。

でも、部長はそんな後先の事も考えてゐるはずない…………ただ、プ  
ライドを傷つけられて黙つていられず、仮面ライダーに一泡吹かせる  
為だけに優先してゐる始末。

どうしたものか……と思つてゐると……

『やれやれ、自分の仕事を肩代わりしてくれてゐる恩人に對して……  
随分と罵つてゐるんじやないのか？』

「ツ?!誰よ、姿を現しなさい!!」

不意に何処からか声が響き渡る。部長は声を荒げながら、私達と一緒に辺りを見渡す。

すると、建物の影からクツクツと足音を立てながらナニかが前方か  
ら近づいてくる。夜の薄暗さで姿はわからないけど、ひび割れた隙間  
からわずかな月の光がナニかを照らし、その姿を明らかなモノとした  
……

それは全身が炎の様に紅く彩られた体躯に、翼を広げた鳥の様な頭部。両肩は金色で尖つていて、瞳の色は水色。胸の中心部には、宝石の様な丸いモノが浮き出ている。特撮の様なヒーロー然としたかに見える風貌の怪人だつた。

怪人が姿を現すなり、兵藤先輩が神器を出現させながら、我先にと前に出てビシツと指を指しながら吠える。

「テメエは誰だ！さては、お前もあの仮面ライダーつて野郎の仲間だな！」

『だつたら？』

「決まつてる！此所でお前を『倒すつてか？笑わせんなよ……！』ガアアアアツ!!」

「イ、イッセーツ!?」

兵藤先輩が言い終わる直前、その怪人は兵藤先輩に一気に接近した後、炎を纏つた拳で腹部をぶん殴る。ぶん殴られた兵藤先輩は勢いよく吹き飛びながら、壁を2、3枚突き破つた後、頭を強く打ち付けて氣を失つた。

『あ、悪い……ちょっとだけ本気でやつちまつた。まあ、転生悪魔はこの程度じや死なないから問題ねえよな？』

「ツ！よくも私の可愛い下僕を!!食らいなさい!!!」

『ん？』

部長はそう叫びながら、怪人に向かつて滅びの魔力波動を放つた。怪人は至近距離で放たれた魔力を避ける間も無くマトモに命中する。

でも……

『…………今、なんかやつたか?』

「ツ?!う、うそ…わ、私の魔力がそんな……!?

怪人は、滅びの魔力を受けたにも関わらず……まるで効いていた  
かつたかのように悠然と立っていた。

部長があり得ないと驚愕するが、現実は変わらなかつた。

『まあ、女をいたぶるのは趣味じゃないからな……今日はこの辺で帰  
らせてもらうぜ。ああ、自己紹介がまだだつたな。俺の名はフェニッ  
クス……しがないファントムだ』

「……フェニックス」

「フア、ファントム?」

「聞いた事の無い種族ですわ……」

『さて、名乗り終わつたつて事で俺は帰るぜ? ジゃあな、機会があれば  
……また会おう』

「ツ!ま、待ちなさい!! 何が目的でこのリアス・グレモリーが管理する  
……キヤツ!?

部長が言い終わる前に、フェニックスと名乗る怪人は身体から炎を  
発し……その場から消えた。

「……な、何よアイツ!! 仮面ライダーといい、さつきのフェニックスつ

て奴といい……なんで私の管理する町で、あんなわけのわからない連中ばかりが現れるのよ!!」

「リアス、此処は一旦退いた方が得策かと……」

「……わかつてゐるわ、そんな事ぐらい。祐斗、イツセーをお願い。すぐ  
に撤収するわよ……」

「はい」

兵藤先輩を祐斗先輩に任せ、部長が転移魔法陣を展開する。そして、部長達が魔法陣へと入つていき私も朱乃先輩と一緒に魔法陣へと向かった。

## E p i S o d e 1 3

小猫 s i d e

フェニックスと名乗る怪人と遭遇した翌日の放課後。私はオカルト研究部で、呆れと一緒に“帰りたい”と思いながら……くだらない口論を聞かされていた。

今、私達の目の前に居る人は部長の婚約者候補であり、フェニックス家の三男である金髪のホスト風の男性……ライザー・フェニックス様と、彼の付き添いとして同行しているのは金髪の縦ロールのツインテールに、桃色の貴族ドレスを着用した少女……ライザー様の妹のレイヴエル・フェニックス。

そして、部長とライザー様の真ん中に立たれている銀色の長髪で髪の両端と、後ろを三つ編みにしメイド服を着用した女性……この方こそ、部長のお兄様で現四大魔王の一人であるサー・ゼクス・ルシファー様の奥様で、部長の義姉であるグレイフィア・ルキフグス様が立会人として、二人を見守っていた。

因みに、兵藤先輩はグレイフィア様とレイヴエルさん（特に胸を凝視）をいやらしい笑みを浮かべながら見ていたので、私が肘打ちをかまして黙らせました。

それにもしても……レイヴエルさんって誰かに似ている様な見覚えがあるんですけど……私の気のせいかな？

「何度も言わせないでライザー！ 私は貴方と結婚なんてする気は無いわ!!」

「あのさあ、リアス。じゃあ、この際ハツキリ言わせてもらうけど……ぶつちやけ、この縁談はグレモリー家から持ちかけてきた訳でしょ？ それなら、持ちかけた側の娘である君の拒否権は無い。即ち、リアス：君がどんなに嫌でも、どんなに否定しようと俺との結婚は免れな

「いつて訳なんだよ。お分かり?」

「そんなの知らないわ!それはお父様やお兄様が勝手に決めたことでしょう!?私の婚約相手は私自身が選ぶ、貴方みたいな男と結婚なんて死んでもお断りよ!」

「ダメだ……全く聞いてやくんないよこの娘。どうする、レイヴエル?お前の義姉ちゃん候補をさ、なんとか説得つて出来ないのかねえ?」

「……私もこんな器の小さい方がお兄様のお嫁様で、私の未来の義姉様なんて正直納得できませんね?全く、お父様達も面倒なのを嫁ぎに選んでくれたんでしょう。これならユーベルーナかイザベラの方が……」「悪いけど、俺はアイツ等を嫁さんにする気は無いからね?」あら、私はお兄様の婚約者候補として彼女達が適任かと思うのですが……」

「まあ、確かに家の眷属の皆は綺麗で可愛いくつて、その上素敵な女性ばかりだよ?でもね、俺にとつてはアイツ等もお前と同じくらいに大切な家族の一員だ。だから、主の俺が彼女達に手を出したら悲しむに決まってる……だから、俺は彼女達の幸せを壊したくないんだ。女性の初めでは誰だつて好きな人に捧げたい……お前も分かるだろ?その気持ちをさ……」

「レイヴエル……あ、それなら眷属の皆にお兄様の寝ている隙に夜○いや、○○○○……はたまた大勢で○交なんてやつちゃえば、お兄様もめでたく全員と結婚して、この縁談も破綻するかもしませんわね? (小声)」

「レイヴエル……年頃の女の娘がそんな用語を使っちゃいけません。お兄ちゃんさ、お前の今後が心配になつてきちゃつたよ……」

「ちよつと?!何よ、私を無視して兄妹二人だけでコソコソと!!とにかく、私は貴方と結婚なんて絶対しない!婿養子も私自身で決める!!ただでさえ仮面ライダーの事だけでストレスが溜まっているのに、これ以上イラつかせないで!!」

勝手に盛り上がっているフェニックス兄妹が気に入らないのか、部長は鋭い視線で睨みながら強く叫ぶも……当の本人達はそんなのは関係無いとばかりにあどけない表情で部長を見つめる。

「良いわ!そつちが婚約を破棄しないのなら、上級悪魔同士『レー テイングゲーム』でケリをつけましょう!!貴方が勝てば、私は結婚を認めて婚姻を結ぶ……だけど、私が勝てばこの縁談は無かつた事にしてもらうわよ!!」

「え?・ええツ?!ちよ、待てよリアス!!何、話をややこしくしちゃつてる訳!?俺はただ、お互にこの縁談をどうするかって話合いに来ただけだよ!!それで、何処でどうなつたらレーテイングゲームになるんだよ!!」

「あら……まさか、怖じけついたのかしら?貴方はもう公式のゲームを何回も出場して、勝ち星が多いって聞いていたけど……まさか、私に負けるのが怖くなつた訳じやないわよね?アハハ!まさかあのライザーが私に負けるのが怖いだなんて、可笑しくて笑いが止まらないわ!!」

突然のレーテイングゲームに混乱するライザー様の姿に、部長はこれ幸いにケラケラと嘲笑つてる。

ちよつとこれはアンマリでは無いかと思つていると……レイヴェルさんが炎のオーラを纏わせ、部長に鋭い目付きで睨みつけながら口を開いた。

「……聞き捨てなりませんわね、リアス様？確かに一人の女性としては、望まれない愛のままに婚約を結ばせられるのは些か納得なされないと思われます。ですが、それを理由に私のお兄様を侮辱する行為は見逃せません！今すぐ、お兄様に謝罪なさってください！」

「ちよつと待てよ、なんで部長が謝るんだよ!? 悪いのは、その金髪ホスト野郎だろ！部長は関係ねえ!!」

「関係大有りです！それと、部外者は口を挟まないでくださいまし!!」

「俺は部外者じやない！れつきとしたリアス・グレモリー部長の兵士、  
兵藤 一誠だ!!」

「止めるんだ兵藤君！これは、僕達下僕悪魔が介入していい問題じやない！申し訳ございません、ライザー様。彼は眷属に加わったばかりでして、まだ色々と……」

「いや気にしていないよ、グレモリーの騎士君。<sup>ナイト</sup> それと、レイヴエルも落ち着け。俺は別にそんな事を言われても気にはしないさ」

謝罪を申し込むレイヴエルさんに対し、噛みつく兵藤先輩を祐斗先輩が止めに入つた後に深々くお辞儀をしながら謝罪し、ライザー様もレイヴエルさんの頭を撫でながら宥める。

「さてと……俺もフェニックス家の看板を背負つてる身だ。リアス、そのレーティングゲーム……乗らせてもらうぜ？君が勝てば好きにしろ……でも、俺が勝つたら言うことを聞いてもらう。文句ないな？」

「ええ、もちろん。私の魔力と可愛い下僕達で……貴方に敗北を味あ

わせてあげるわ!」

「ちよい待ち、その前にハンデをくれてやるよ」

「……ハンデですって? 一体、どういう「まあ、皆まで言うな!」は?」

「リアス、確かに君は今回で初めてのレーイングゲームだろう? そして、俺はゲームで幾つか勝利を掴んでいる……そんなのが戦えば、確実に君達の負けだ。だから、レーイングゲームの開始は10日後。その間に、君や眷属は特訓なり戦略なりを考える時間を与えたまつていう俺の粋な計らいさ……」

「……そうね、確かに悪くはないわ。でも、後悔しないことね? その10日後が、貴方の敗北で終わることを……」

「いや、俺は負けないさ……それじゃあ、10日後のレーイングゲーム。楽しみにしているぜ……帰るぞ、レイヴェル」

「はい、お兄様。それでは、皆様ご機嫌よう……」

レイヴェルさんがスカートの両端をあげながら、私達に一礼した後。ライザー様と共に魔法陣に入り、炎に包まれながら部室から去つていった。

「ハツ、負け惜しみを……! グレイフィア、すぐにこの事をお兄様達に伝えてちょうだい。それと伝言で『私の人生は私が決めるから、首を突っ込まないで』ってね?」

「ハア……戻りました、リアスお嬢様」

「さあ、明日からの10日間は合宿を行うわよ! あのライザーに、私達

の本当の恐ろしさを思い知らせるために!!

「はい、部長!」

部長が変な自信と共に合宿宣言すると、兵藤先輩も意気揚々とそれに賛同する。

だけど、相手はレーティングゲーム体験者のライザー様率いるフエニックス眷属。対する私達、グレモリー眷属は今回初めてのレーティングゲーム。

ダメだ、敗北のイメージーションしか思い浮かばない…………

でも、この面倒なレーティングゲームによつて……私はとある方との出会いを果たし、はぐれ悪魔として指名手配されていた黒歌姉様と再会する事を……まだ、その時は知らなかつた。

## E p i S o d e 1 4

小猫 side

部長の婚約を賭けたグレモリー眷属対フェニックス眷属のレー  
ティングゲーム。その10日間、私達はグレモリー家が所有する人間  
界の山で特訓をする事になつた。

駒王町の管理を任せられている私達がしばらく不在の間は、部長と同  
じく貴族悪魔の次期当主であり、駒王学園生徒会長を勤めている支取  
蒼那ことソーナ・シトリーカー会長とシトリーカー眷属の皆さん代わりを  
補つてもらつていて。でも、私としてはソーナ会長が管理者に向いて  
いると思うんですけどね……

それには理由がある。まず、ソーナ会長はどちらかといえば過激派  
の部長とは真逆の稳健派で、争い事では無く平和的な解決で場を収め  
ようとしている事。堕天使や天使といった他種族との共存を願つて  
いる事。そして、生徒会長としての表の姿とシトリーカー家次期当主とし  
ての裏の姿……異なる二つの世界でも会長本人の人柄の良さやカリ  
スマ性、そして自分を慕う住民や生徒達からの圧巻なる支持率。その  
全てこそが、ソーナ会長が築き上げてきた努力であり、駒王町の管理  
者に相応しいと思える理由だ。

さて、そういうしている内に山頂に建てられたグレモリー家の別荘  
に到着早々、私達は動きやすい服装……駒王学園のジャージに着替え  
始める。ライザー様からハンデとして与えられたこの10日間とい  
う少ない猶予……それを一秒たりとも無駄には出来ないと認識しつ  
つ、着替え終えた私達は中庭へと集合する。

「良い? 10日後に行われるライザー率いるフェニックス眷属との  
レーティングゲーム……このゲームには私、リアス・グレモリーの結  
婚が掛かっているの。でも、それだけじゃないわ……もし、ゲームで  
連戦連勝を誇るライザーに勝てば、私達は初めてのレーディングゲー  
ムで勝利した素晴らしいチームとして冥界の住民やお兄様方魔王様、

そして冥界上層部の方々から多くの称賛を贈られて、私達の願いが叶う時が近づくはずよ？」

「願い……つて事は、このゲームに勝てば部長の結婚が無くなるのと同じく、俺の長年にまで夢見た『ハーレム王』になれるっていう願いも含まれるんですよね!?」

「ええ、その通りよイッセー。眷属の望みが叶うのは主である私も望んでいる事なの……もし、貴方が今回のゲームで功績を残した暁には……貴方のお願いを何でも叶えてあげるわ」

「な、なんでもつすか!! いよっしゃあつ!! だつたらなおのこと、あんなイケすかねえ金髪ホスト野郎に部長は渡すわけにはいかねえ!! リアス部長、俺やつて見せますよ! 今回のレーティングゲーム、必ず部長の為に勝つてみせます!!」

「フフ……良い子ねイッセー。貴方の頑張り、期待しているわよ? (ふん、単純な男……でもまあ、こういった子ほど扱いやすくて良いのよね。ま、せいぜい私の為に働いてちょうどいいね? イッセー……)」

「はい! 任せてください!! (何でもかあ……つて事は部長や朱乃さん、そして小猫ちゃんやこの前会つたレイヴエルって娘とあんな事やそんな事が出来るかも…………!)」

「…………」

余裕そうな笑みを浮かべながら、何かを企んでいる部長とこれ見よがしにスケベな事を考えている兵藤先輩の二人に対し、私は呆れるしかなかつた。

そもそも、事の発端は部長の我が儘から始まつた事だ。ライザー様は見た目はチャラ男の様な人で眷属は女性ばかりなその反面、温厚か

つ誠実な平和主義者でソーナ会長と同じく、天使や墮天使の二大勢力との和解を望んでいる。それなのに部長はライザー様との決められた結婚が嫌で、強引に無謀なレーティングゲームで婚姻を無かつた事にしようとしている始末。

私はそんな事を思いつつ、ため息を吐きながらその場を離れようとする

「ちょっと、小猫。一体何処に行こうとしているの？まだ大事な話は終わっていないのよ？」

「……何処って、決まってるじゃないですか。特訓できる場所を探しに行くんですよ。そんな下らない話ばかり聞いていたら、10日間なんてとっくに過ぎちゃいますからね」

「なつ、下らないですって！？今回のゲームは私の婚約と、私達の今後を賭けたゲームなのよ？！それを下らないですって！！！」

「ええ、そうですよ。だから、此処からは別行動で部長や先輩方は仲良く特訓をしていてください。私は私で勝手にやらせていただきますので……」

「ま、待ちなさい小猫！貴女、最近可笑しいわよ！まさかあの仮面ライダーに洗脳か何かをされたんじや……「別に正気ですよ？」なツ！」

「第一、なんでそこで『仮面ライダーさん』の所為にするんですか……部長は上手くいかないことや、間違いを犯した時は全部あの人には責任をなすりつけるつもりですか？そこまで責任転嫁する人だと知りませんでしたよ。情愛のグレモリーの一族が聞いて呆れますね？家族や眷属、自分に従う人達以外は全て敵か邪魔者として軽蔑してる……それでよくグレモリー家の次期当主と名乗れますね？」

「……何よ、その反抗的な態度。私は貴女の主なのよ？主の私に歯向かうつもりなの!!」

「別に反抗的でも歯向かっている訳では無く、事実を言つたまでですよ？話は終わりですね、ではこれで……」

「ちょ、ちょっと待つてくれよ小猫ちゃん!?さつきのは言い過ぎだろ!!部長だつて、結構頑張つてんのに「ほつときなさい、イツセー」ぶ、部長!!」

「主人である私に歯向かう眷属なんて居ても邪魔になるだけよ……そんなに一人で特訓をしたいなら好きにしなさい。けど、小猫！これだけは覚えおく事ね？貴女がボロボロに怪我をして別荘に帰つてこようが、泣こうが土下座しようが私は絶対に許さないわ。暫く一人で反省してなさい……この別荘に帰つてくるのもダメよ。良いわね？」

「別に良いですよ？その方が特訓がしやすいですし……サバイバル訓練も悪くないですからね？」

私はそう言い残して、別荘を後にした。

鬼崎 s i d e

黒歌さんに専用のネビュラスチームガンやその他のアイテムを渡

した数日後。僕は断罪の地獄城にあつた幾つかの研究資材と、機器を幽霊列車に詰め込んで夏煉が居るこの異世界へやつて來た。

とある山奥へと着陸した矢先に、運良く発見した洞窟を専用の秘密研究所として改築。デカデカと飾られた巨大なモニターに、長机の上に置かれているのは様々な機械の部品や空の試験管、ノートパソコンにもなるタブレット、そして何枚もの書類。びつしりと横に並べられた薄緑色の培養液が入つた幾十もの生体ポッドと反対側にもきつちりと並べられた最新のコンピューター機器、そして端にはちよこんど身近なキッキンとテーブルがある。

僕はあまりにも秘密研究所の完成具合と此処にある完璧な設備に、思わず嬉しさを抑えられずに右手で顔を隠しながら笑つた。

「ククク……完璧だ。此處でなら実験は勿論、新しい兵器の開発やフルボトルを造り出す事が沢山できる。笑いが止まらないとは、まさにこの事だね……！クハハハ、ハハハハハハハ！！ハハハハハハあ、はあ～……笑い疲れたな。気分転換に外の空気を吸いに行くとしよう」

大笑いもつかの間、僕は笑い疲れたので気分転換に外へと足を運ばせる。

數歩歩いて森から出でみると、小さな川にたどり着いた。僕は両手で数量の水をすくつて、飲んでみる。とても澄んでいて飲みやすく喉が潤う。

「うん、美味しいね。時々飲みにくるのも悪くは……ん？」

そう満足していると、不意に向こうの森から人の気配を感じる。僕は疑問に思いつつ、其処へと向かうと……

「おや、君は……？」

「ツ?!誰ですか……貴方は?」

僕の様な白髪で両端には黒猫の髪飾りをつけ、輝くような金色の瞳。そして、何処かの学校のジャージを着用した小柄な少女と遭遇する。取り敢えずは警戒している彼女を落ち着かせるべく、僕は両手をあげながら近づく。

「落ち着いてくれ、別に君に危害を加えようなんて思っていない。たまたま近くを散歩していただけだ」

「……怪しすぎますね。特にその髪の色に服装が」

「これは僕のアイデンティティだから仕方ないでしょ？それに君だって、少し僕に似てるじゃないか……特に髪の色がさ」

「……そもそも《ぐ、ぐぐうう》……あう」 //

「……えつと、もしかしてお腹が空いたのかな？」

「べ、別に貴方には関係な《ぐぐうう》……ツ!?」 //

腹の虫が鳴く音を聞かれ、少女は恥ずかそうに顔を真っ赤にする。  
あ、ちょっと泣いてるね…この娘。

僕は苦笑しつつ、彼女に話しかける。

「ハハハ……そんなに意地をはらなくてもいいさ。僕も丁度お腹が空いたからね？良かつたら、一緒にどう？料理には自信があるんだ」

「……そ、それじゃあお言葉に甘えて」 //

「決まりだね？あ、僕は鬼崎 陽太郎。君は？」

「塔城 小猫です」

「そうか……では、小猫くん。君を我が秘密研究所初の客人として案内しよう」

「研究所…………ですか？」

「ああ……やつ、こっちだ案内しよう」

僕はそう言いつつ、小猫くんを出来立てほやはやの研究所へ案内した。

# E p i S o d e 1 5

小猫 side

部長達と別行動を取る事にした私は、特訓ができる場所と寝床を探す為に森の中を散策していた最中……突然、茂みから現れた謎の男性……鬼崎さんと遭遇した。

鬼崎さんの外見はどこか不良の学生を思わせるような感じで……私と同じような白い髪のセミロングに、左目を長い前髪で隠したような髪型。唯一見えている右目は部長の紅い髪よりも更に煌きさを持つガーネットの原石の様で、それでいて怪物の禍々しい血を一つに混ぜ集めた様な不気味さを持つ深紅の瞳。服装は白色のワイシャツに黒いズボン、そしてボタンを開けた状態でワイシャツの上に黒色の学ランを羽織った……まさに髪を染めた不良にピッタリな感じだった。

そして、空腹の状態をその人に見抜かれた私は、鬼崎さんが秘密研究所と呼ぶ洞窟内部に招待され、彼が作ったであろう様々な料理をいただかせてもらっていた。

「……ごちそうさまでした」

「はい、お粗末さまでした。それで味の方はどうだったかな？冷蔵庫に入っていた材料で、出来るだけ美味しい料理を作つてみたんだけど……」

「いえ、とても美味かつたです」

「そう、それは良かつた……ああ、いま食器を片付けるよ。それまで、水を飲みながらゆつくりとしていてくれ」

「あ、わざわざスママセン……」飯を食べさせていただいたただけで

なく……

「フフ、気にしないでいいさ。これは、僕なりの氣づかいだからね?」

そう言いながら、鬼崎さんは料理が上手く出来ていたのが嬉しかったのか、楽しそうな笑顔で私の前に置いてある食器をお盆に全て載せ、チョコンと端にあるキツチンの流し台まで運び、食器を洗い始める。

私はナフキンで汚れた口元を拭いつつ、周りを見渡した。それは秘密研究所と呼ぶに相応しい様な設備が、あちらこちらと目に入る。巨大なテレビモニターにコンピューターの機材、並べられた何かの液体が入った大きなカプセル……明らかに怪しさMAXを思わせる雰囲気に、私は顔には出していないものの……いま食器を洗っているであろう鬼崎さんへの警戒と共に、少しだけ恐怖を感じた。

明らかにあの人人は普通の人間では無い。だいいち、普通の人間がグレモリーネ一家が所有するこの山奥へ来れるはずも無いし、こんな何処にでもある洞窟を設備が整つた場所に改築出来るはずが無い。出来たとしてもそれは人の想像を越えた人か、人外の二つか一つ。だとすれば私と同じ悪魔……あるいは墮天使か天使、いやもしかすれば私の……いや、私達の想像を遥かに越えた種族ではないのであろうか、そういう考えると額から汗がポトリと流れ、身体の震いが止まらなかつた。

そう考えていた矢先……

チーンツ!!

「ツ!?

後ろから突然、電子レンジのタイマー音声の様な爆発が起きた。振り返るとそこには電子レンジの様な形状の機械が置いてあり、ドアが

半端な状態で開いて中から煙がモワモワと溢れ出していた。そして、煙が晴れると中には小さな黒色のキヤップが着いた緑色のボトルが3本入っていた。3本のボトルにはそれぞれ『ユニコーン』『メデューサ』『クラーケン』と思われる幻獣のイラストが、銀色を基調としたエングレーブとして描かれていた。

「おや、どうやら完成したようだね……」

そんな時、丁度食器を片付け終えたらしい鬼崎さんが、濡れた手をタオルで拭きながら電子レンジの中にあつた3本のボトルを取り出す。そして、それぞれのボトルを悪い笑みを浮かべながら眺めた後、上着にある懐のポケットへと入れる。

「あ、あの……」

「ん？ああ、すまないね。どうやら驚かせてしまつたみたいだが……その後ろにある電子レンジの様なモノは僕が今、研究している『フルボトル』を生成する機械なんだ」

「ふ、フルボトル？」

「そうさ」

鬼崎さんはそう言うと、懐からさつきのとは別のボトルを2本取り出した。それは白色で肉食恐竜の頭蓋骨と、黒色で地層の内面を象った絵柄が描かれていた。

『フルボトル』というのは動物や職業などの有機物と無機物、どちらか2種類の成分が充填しているんだ。因みに僕が持っているこれが『恐竜フルボトル』と『地層フルボトル』だ。この2本は最も相性が良い組み合わせ「ベストマッチ」になるんだ

「ベスト、マッチ？」

「まあ、それについては次の機会で説明するとして……小猫くん。君、悪魔でしょ？しかも何処かの貴族悪魔に身を置いている眷属悪魔。違うかい？」

「ツ  
??！」

フルボトルと呼ばれる2本を仕舞つた鬼崎さんは、余裕のある表情から一変して真剣な表情となりながら私の正体を口にした。私は後ずさると共に臨戦態勢をとる。やつぱり、この人は人間じゃない！そう思いながら警戒する。

すると、鬼崎さんは「フツ」と薄く笑いながら向かいの椅子へと座り、私に視線を向けつつ口を開いた。

「そう警戒しなくていい……別に君をどうこうしようなんて考えていない。それに君も、なんでわざわざ初対面の僕が偶然出会つた君を研究所此処へ招待したり、昼御飯をご馳走したり……色々と優しくしてくれるんだろうと思うだろ？」

「……ツ！」

確かにそうだ……私とこの人は出会つて数時間も経つていないので、初対面の私に良くしてくれた。それに、もし鬼崎さんに敵意があるのなら何時でも倒すチャンスがあつたはずなのに、あえてしなかつた。

「…………じゃあ、あえて聞きますが……貴方は私を眷属悪魔と知つて、此処へ連れて來たんですか？」

「まあね、純粹悪魔や眷属悪魔……果てははぐれ悪魔は色々と見てきたからね。出会つて直ぐにわかつたよ……でも、君には眷属悪魔特有のナニカが無くなつていて。それが気になつてね」

「それで私を珍しい研究対象と思つて連れて來た……わざわざご飯とかを『馳走してまで、随分と手が込んだ事をしますね』

「ふむ……何か勘違いしているようだが、僕は君を研究対象とは見ていない。むしろ君を一人の人間として見てるつもりさ、そんな道具の様に人権を無視するような非道な行為と君に危害を加えない事を約束するよ」

「……今さら、信用しようと？」

「僕を敵か味方かを判断し、どう思おうかは君次第さ。だが、先程の約束は守るつもりだ、これだけは信じてほしい。それと、さつきも言ったが、君には眷属悪魔特有のナニカ……そう、君の体内にある『悪魔の駒』が無くなつてているんだ」

「えっ!? 『悪魔の駒』が……ですか？」

「ああ、何か心当たりはあるかい?」

「心当たり…………ッ! (もしかして、あの時……)」

そう、それは私が初めて仮面ライダーさんと遭遇した日。私はあの人に胸を貫かれた……でも、不思議な事に身体には胸を貫かれた跡が残つていなかつた。

そして、鬼崎さんの話が本当なら……私はある仮説に辿り着く。仮面ライダーさんの出現と共に起きた“ばぐれ悪魔の大量消失”、そして私の身体で起きたことと『悪魔の駒』が無くなつたこと……。

「（繋がつた！仮面ライダーさんはもしかしたら、『悪魔の駒』を取り出せる能力を持つている。そして、その能力を使つてはぐれ悪魔狩りをしていた……！それがもし、本当なら……仮面ライダーさんなら、姉様を……黒歌姫様を助けてくれるかも知れない!!）」

そして私は、仮説が真実に変わり……それと共に希望が生まれた。もう一度、黒歌姫様と過ごせるかも知れない……でも、仮面ライダーさんは私の願いを叶えてくれるのだろうか……私はリアス部長のグレモリー眷属で敵対する側。易々と了承してくれるはずがない……こんな時、自分の置かれている立場を呪わずにいるられない。せつかく……せつかく姉様を、助けられる事が出来るかも知れないのに……！

私は今さら弱い自分が情けなくて、悔しくて……不甲斐ないと思いつながら、瞳の端に涙を溜め、奥歯をギリギリまで噛みしめながら血が出るほどに拳を握りしめた。

欲しい……！

誰にも文句を言われず、自分を変える力が……

もう二度と大切な人達を誰一人、失わない力が……

黒歌姫様を助けられる力が……

私が私自身の限界を超える、強い力が欲しい!!

そんな心の叫びを誰が聞いている訳でも無く、ただ虚しく頭の中で響くだけだった……

そう思っていたのに……

「……欲しいのかい？」

「え？」

鬼崎さんが突然、私へと話しかけた。その顔は冷静にかつ真意を確かめる真剣な顔だった。

「君が本当に心の中で、自分を変えられる力を欲しいと思うなら……僕が力になろう。だが、強大な力を得るには地獄のような苦痛と君の命を代償にしかねないリスクが伴う。それでも力が欲しいかい？」

「苦痛とリスク…………！」

「君はまだ若いし、年頃の女の子だ。無理をして一度だけの命を散らす必要はない、だから……「構いません」…………今なら引き返せるのに？一度始めたら、もう後戻りできないとしても？」

「だからです…………私には、探さないといけない人達が居ます。だから、それを成し遂げるには私の持つ全てを超えないといけないんです。鬼崎さ…………いえ、師匠…………私を鍛えてください!!お願いします!!!」

私は誠心誠意の土下座で頼みこんだ。姉様と再び会う為に、最後の希望にかける為に…………そして弱い自分と決別し、超える為に…………そして師匠は、ため息と共に何かを諦めたかの様な顔をしながら、ゆっくりと私へと手を伸ばす。

「…………負けたよ、君の覚悟にはね。良いだろう、君の力になつてあげる。ただし、弱音を吐いたり、悲鳴をあげても止めないからそのつもりで頑張ることだね？」

「…………あ、ありがとうございます!!!」

こうして、フェニックス眷属とのレーティングゲームまでの10日間の猶予……私は師匠から与えられた地獄と相応しい特訓を受けることになった。

全ては……私の願いを叶える為に……